

水の文化

特集

みんな、泳いでる？

水の文化 July 2024 No.

77

特集

みんな、

目次

4

巻頭エッセイ「ひとしずく」

川ガキと共生する地域の未来

村山嘉昭

6

「スポーツ科学」

「泳ぐ」にまつわる水とヒト

——あらためて考える水泳文化の未来—— 高木英樹

ヒトに適した、
もっとも古い
泳ぎ方は？

10

「身体教育・生活文化」

水を怖れず、侮らず、逆らわない！

——水練学校が伝えつづける泳ぎの哲学——

大衆が
泳ぎを教わる
ようになった
のはいつ？

14

「生活文化 観光研究」

泳ぐだけじゃない?! 海水浴の価値

——「海離れ」の今こそ海辺を考える——

畔柳昭雄

日本人の
海水浴はいつ
始まった？

16

「生活文化」

漁師さんはみんな泳げるの？

——南房総の人びとに聞いた、海辺の暮らし——

海と川、
泳ぎやすい
のは？



今年も夏がやってきました。
皆さん、最近泳いでいますか？

「泳ぐ」という行為は、かつて人間が食料を得るために必要な術でした。戦国時代には武術の一つとなり、江戸時代には水域に応じた泳法が各地に生まれます。明治時代に海水浴が療養法として注目される一方、大正時代にクロールなど西洋式の近代泳法が取り入れられると、泳ぎはタイムを競うものへと変わっていきました。戦後の高度経済成長期には全国の小中学校にプールが整備されます。

そして今、学校プールが徐々に減り、海水浴離れも囁かれています。曲がり角を迎えているようにも見える「泳ぐ」について、あらためて考えてみませんか？

泳いでる？



川で
どうやって
遊んで
いるの？

28

「生活文化」

「日本最後の清流」で育った川ガキたち
——川で安全に泳いで遊ぶ知恵の伝承

学校
プールが広まった
きっかけは？

20

「教育学」

いつまでもあると思うな、学校プール
——これからの水泳授業を考える 福岡尚子

24

「身体教育・社会学」

なぜ180種もの泳ぎ方が？
——日本泳法の一流派「水府流水術」を訪ねて



各地で
日本泳法が
発達した理由
とは？

32

「文化をつくる」

見えてきたのは「泳ぐ」の多彩さ 編集部



木曾川の
「堤」に着目

今年度は
長崎県
島原市へ



51

(敬称略)

編集後記／ご案内

50

センター活動報告

48

水を想う 水文ショートインタビュー

42

Go! Go! 109水系26
社会の変遷とともに堤防伸びゆく 木曾川
坂本貴啓

36

みず・ひと・まちの未来モデル10
暮らしに根づいた水場の「価値」存続の論理
——名水百選「浜の川湧水」から考える生活と観光
野田岳仁

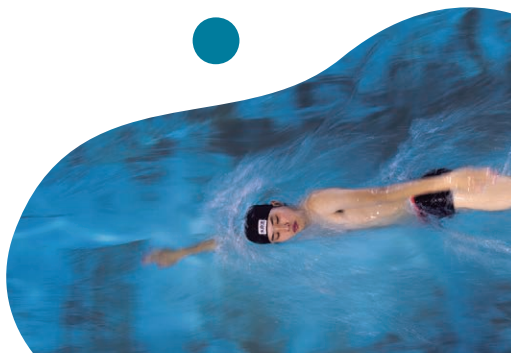
34

食の風土記23
「水中のエメラルド」を食す「じゅんさい鍋」

秋田の
夏に
食べる鍋

連載

取材でお会い
した人たちの
「水の思い出」
「水への思い」



村山嘉昭

写真家

川ガキと共生する 地域の未来

ひとしづく

公園やプールと同じように川などの水辺を日常的な遊び場に行っている子どもたちがいる。彼ら彼女らは自宅から水着姿のままで川へと向かい、友だちやきょうだいと競い合うように泳ぎ、水中へ潜って遊んでいる。中には網やモリを握りしめながら魚を追いかけて、度胸試しを楽しむために橋などから飛び込む子どもたちもいる。遊び疲れると河原の岩などで冷えた身体を温め、夕方近くまで水辺で過ごしたり

もする。遊び方は環境や年齢、地域や季節によって様々だが、どの子どもはちきれんばかりの笑顔をしているのが特徴だ。このような子どもたちをわたしは親しみを込めて「川ガキ」と呼んでいる。

川ガキが「生息」する地域では、そこに暮らす大人たちも元川ガキの確率が高く、水辺への関心が強い傾向にある。小さな頃から川に親しんできた人が多いため、子どもが水辺で遊ぶのはしぜんなことだと理解し、放任ではなく認知しているのだ。川遊びは危険と隣り合わせでもあるが、このような地域では大人たちが川の流れや地形を把握しており、強い力で深みへ引き込まれる場所などを事前に子どもたちに教えたりもしている。楽しさを知るだけでなく、どこが危ないかを地域の大人が熟知し、見守っているのだ。子どもたちも経験を重ねながら楽しく遊ぶための知恵をつけ、年長者

が年少者の面倒をみていたりする。川での事故を防ぐには起こり得るリスクを知ることが必要で、危ないところには近づかず、普段と違う水位や水温の変化に気づいた時には迷わず遊びを止めることが大切だ。子どもたちは親だけでなく地域の大人から時には叱られながら、川との付き合い方を学んでいる。

川ガキ生息地の中には、場所を指定して地区公認の水泳場を設けているところもある。長崎県川棚町を流れる石木川もそのひとつで、地域の子どもたちは気温が高くなる5月頃から川で





長崎県川棚町を流れる石木川にて（2023年8月）撮影：村山嘉昭

遊びはじめる。石木川は県内でも有数のゲンジボタル生息地として知られているが、地区の住民はホテルと同じくらい子どもたちが遊べる環境を大切に扱い、守り続けている。川ガキが生息していくには彼らを見守る大人の存在が欠かせないのだ。

かつては至るところで姿を見かけた川ガキだが、現在はその存在が貴重に思えるほど全国的に減少している。水質悪化やダムなどによる河川開発の環境変化も減少要因のひとつだと言えるが、水辺を必要以上に危険視する社会の風潮が絶滅に拍車をかけていると、わたしは考えている。川から人が遠ざかり、地域社会が水辺を含む自然環境に対して無関心になればなるほど、川ガキは姿を消していく。

青空を映して流れる川面には、セミの鳴き声をかき消すような笑い声が良く似合う。水しぶきを上げながら自然の中で遊ぶ川ガキの姿は、未来へ残したい大切な日本の原風景とも言える存在だ。川ガキを絶滅させないためにも、身近な水辺環境に関心を向けて欲しいと思う。

村山嘉昭（むらやま よしあき）

1971年に横浜で生まれ、鶴見川水系の環境で育つ。農業系出版社の写真部勤務を経て、2005年に独立。2017年に吉野川水系の徳島市へ移住。日本写真家協会会員。著書に『川ガキ』（飛鳥新社・2012年）『石木川のほとりにて〜13家族の物語』（パタゴニア・2016年）『サバニ 旅をする舟』（海想・2016年）など。

つわる

水とヒト

あらためて考える 水泳文化の未来

「泳ぐ」を考える場合、「水」の物性や抵抗を外すことはできません。水中で身体が浮くしくみや、泳ぐのに適した水温と体温の関係など、意外と知らないさまざまなことを「水泳・水中運動」に関する力学がご専門の高木英樹さんに解説していただきました。

ヒトの体が水に
浮くのはなぜか？

泳ぐヒトと水との関係を知るには、まず水の物性を理解する必要があります。それには空気と比較

実験用の回流水槽で泳者に作用する抵抗力を測定している
提供：高木英樹さん

「泳ぐ」にま

すればわかりやすいでしょう。

空気には熱を伝えにくい性質があります。例えば寒冷地で窓を二重構造（ダブルサッシ）にする家が多いのは、空気の層を保ち冷たい外気をできるだけ遮断するためです。一方、水は熱を伝えやすいので、水温が体温より低いと身体から熱が奪われます。公共のプールでは水温を28℃～30℃に設定していますが、競泳の国際大会などでは26℃前後に設定します。なぜなら激しい運動をすればするほど大量の熱が体内で生産され、水温が体温より低くないと十分に熱が放散されず、動きにくくなるからです。

また、水も空気も流体ですが、水は空気よりも800～900倍ほど密度が高いため、水中では動きにくく、速く泳ぐことは体力的にも技術的にも難しいのです。

水の密度の高さは抵抗だけではなく、浮力も発生させます。水に入ると身体が水を押しのけますが、水面に近い（浅い）部分は水压が低く、水面から遠い（深い）部分は水压が高い。その水压の差で身体に浮力が発生するのです。実は空気中でも、身体は空気を押し退けているので浮力が働いているのですが、空気の密度は微々たるものなので感じません。ちなみに海のほうが浮きやすいのは、溶けている



インタビュー

高木 英樹さん

筑波大学 体育系 教授

TAKAGI Hideki

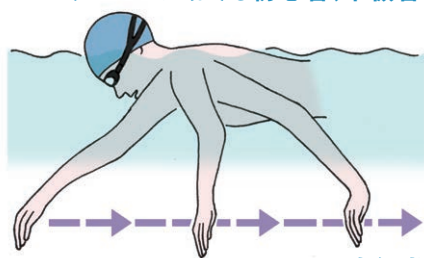
1962年岐阜県生まれ。筑波大学体育専門学群卒業、同大学院体育研究科修士課程修了。博士（工学）。三重大学教育学部講師、筑波大学体育科学系講師などを経て2011年より現職。共通教育の水泳実技を担当し、水泳の楽しさを伝えるために学生とともに泳ぐ。2010～2011年は水球男子日本代表チーム監督を務めた。著書に『人はどこまで速く泳げるのか』などがある。

塩分によって密度が高いからです。水の物性の特徴を泳ぐことに関連してまとめると、熱電率が高いので水泳に適した水温があり、密度が高いので抵抗は大きいものの浮力も生むということです。

泳ぐことのメリットと 水中での身体の変化

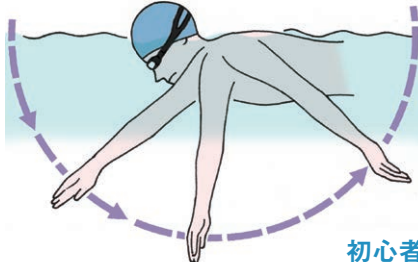
水中で起こる身体の変化としては、まず体温より低い温度の水に浸かると熱を奪われないように血管が収縮しますが、すぐに代謝を上げて熱の生産性を促進する生理的反応が起こります。冷たい水に入ると身体がブルブル震えるのは、筋肉を収縮させて熱を発生させている証拠です。そして、34℃～35℃の水温だと温かくも冷たくも感じなくなります。これを「不感温度」といい、熱い風呂に浸かる習

クロールにおける初心者、中級者、上級者に見る腕の動かし方（推進力）の違い



中級者

肘を曲げてまっすぐに後ろにかく。かき始めこそ慣性力が得られるものの、水の塊が渦をつくりながら後方へ流れ出るので十分な慣性力が得られない



初心者

肩関節を中心に、腕をまっすぐ伸ばしたままぐるぐる回す。これだと推進力を生むのは体の真下をかいているときだけなので懸命に水をかいても進まない



高木さんの研究室が取り組むクロール泳の解明に関する実験風景 提供：高木英樹さん

慣のない欧米人は33℃～34℃と日本人よりも若干低めです。35℃～36・5℃になると自律神経系のかなの副交感神経の活動が優位になり、リラクゼーション効果が高まります。

水圧も人体に影響を与えます。水圧で表面血管が圧縮されると、下半身から心臓へと戻る静脈血の循環量が増え、心拍数が減るのです。イルカやアザラシではもっと顕著で、潜行時の心拍数は安静時より50%減少するといわれています。これは脳の血流を確保する「潜水反射」という生理的機構ですが、陸での生活に適応したはずのヒトも実は潜水反射をもっていることはとても興味深いです。また、水中では浮力が働くため

体重を支える力は少なくてすみす。筋力が衰えた高齢者でも膝や腰への負担が軽くなり、泳いだり歩いたりできるのです。しかも、水中では抵抗も大きいので、体重の負荷が少ないうえ、ゆっくり泳いでもある程度の運動量を稼げるメリットがあります。陸上では転倒が怖くて介助が必要な高齢者でも、水中なら不安定ではありませんが浮力と抵抗があるのでバタンと倒れることがなく、安全にリハビリができるのです。

平泳ぎから始まった ヒトの泳法

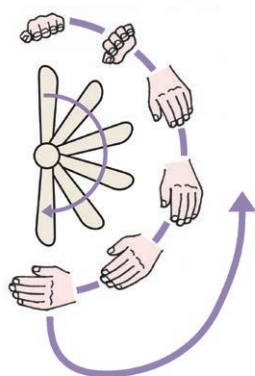
最初のアテネオリンピックで行なわれた競泳は、今でいうところ

の自由形でしたが、ほぼ全員が平泳ぎでした。イギリスの最古の水泳教本でも平泳ぎを教えています。

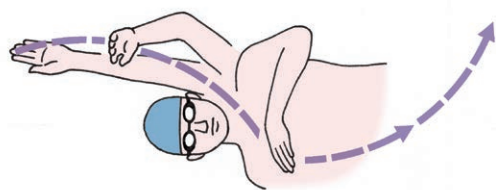
平泳ぎがなぜヒトに向いているかというと、顔を前へ上げて手足をかくと気道が開くので呼吸がしやすいからです。かいた手を水の上に出すと、水のなかに浸かっている体積が少なくなるので、浮力が小さくなって沈んでしまえますから、よほど上手に水をとらえていないと顔を上げっぱなしにはできません。しかし平泳ぎは、かいた腕も足もそのまま戻します。浮力の変動が少なく息もしやすいので最初に発達したのが平泳ぎなのです。

平泳ぎでかいた手を水中で戻すと浮力の変動は少ないですが、戻すときに抵抗が生まれるので、速く泳ぐのには向いていません。そこでもっと速く泳ぐために生まれたのが、手を抵抗の少ない空気中に出す背泳ぎ、クロール、バタフライです。これらは平泳ぎとは逆で、足よりも手の推進力のほうが大きいことを利用して速く泳ぐ方法です。日本には横泳ぎの古式（日本）泳法がありました。これもかいた手を水中に戻すので速く泳ぐには不利です。

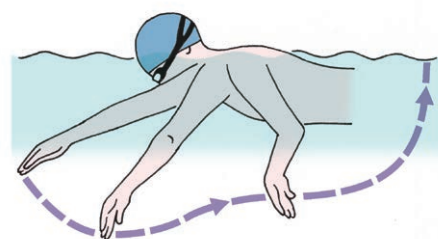
近代四泳法は、平泳ぎ↓背泳ぎ↓クロール↓バタフライの順に生



前方から見た
手の動き



水底(真下)から見た動き



上級者

入水後に腕を曲げるが、常に肘が指先より高い位置を保ち、S字を描くようにジグザグにかくため推進力が得られる。前方から見るとスクリューに似ている

出典：高木英樹著『人はどこまで速く泳げるのか』（岩波書店 2002）を参考に編集部作成

まれました。ドルフィンキックと呼ばれる両足を揃えて上下に動かす現在のバタフライの泳法を考案したのは1954年（昭和29）、日本の長沢二郎選手です。膝を痛めて平泳ぎの「カエル足」ができなくなったことから仕方なく開発した、いうなれば〈怪我の功名〉でした。しかしながら、もともとずんぐりむっくりの日本人の体型は、手足が長くスラリとした欧米人に比べて競泳には向いていません。水の圧力抵抗は流線型に近い細長い体型のほうが少なくてすむからです。「フジヤマのトビウオ」と言われた古橋廣之進選手が戦後まもなく新記録を樹立し、一時期、日本人が世界の競泳を牽引しました。古橋選手は、できるだけ長く水をかいたために、まっすぐではなくジグザクに手を動かすといった独自の泳法技術の工夫によって日本人の不利な体形のハンデを乗り越えたのです。

本来の水泳文化は 「自分の身を守る術」

四方を海に囲まれ河川・湖沼の多い日本ほど水に恵まれた国はありません。日本人は水に入ることにはさほど抵抗がないですし、古式泳法も各地で発達しました。そう

した素地があったからこそ、古橋選手を筆頭に近代泳法のキャッチアップが早かったのでしょう。日本で水泳の文化が発展してきたのは必然性があったのだと思います。この運動文化を今後も継承したいものです。

昨今、水難事故が頻発しています。もちろん、レジャーとしての水泳、先に述べたような高齢者にもふさわしい運動習慣としての水泳という効用も大切です。しかし、もう一度、基本に戻って、水難事故から自分の身を守る術としての水泳という側面を強調すべきではないでしょうか。

水泳は他人から教わったり、他人の泳ぎをじっくり見覚えて真似しないとなかなか身につかないので、文化として継承していかねばなりません。

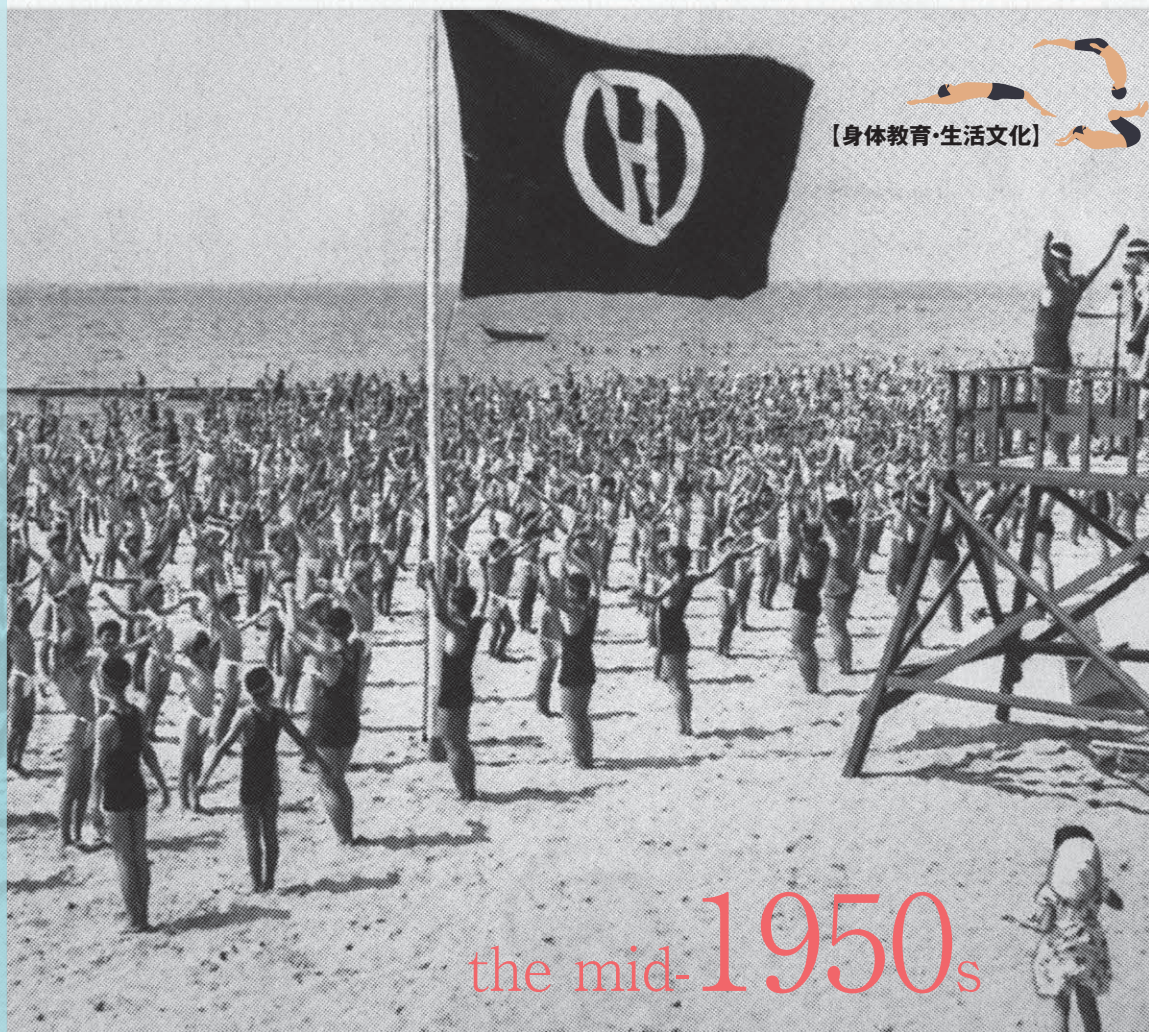
私たちは大学で教員志望の学生に次のような教え方を講義しています。水中でパニックにならないためにはどうすればよいか、どうやって助けを待つか、着衣のままどうすれば泳げるか——まずそれらを習得してから、泳法や速い泳ぎ方などについて学ぶのです。

今こそ原点に立ち返り「自己保全能力としての水泳」の運動文化を継承していくべきだと思います。

（2024年4月11日取材）



【スポーツ科学】



the mid-1950s

浜辺いっぱいに広がって体操する浜寺水練学校の生徒たち(昭和30年頃)
出典:『毎日新聞社 浜寺水練学校100年史』(毎日新聞大阪本社 2006)

水を怖れず、侮らず、逆にわらない！

国策を背景に誕生した 誰もが泳げる水練場

大阪平野の南、大阪湾に一部を面する堺市に、7月から8月にかけて開校する泳ぎの学校「はまだらすいれん浜寺水練学校」があります。その歴史は110年超。日本泳法・能島流(注1)の教えを土台とし、多くの人々に水泳の楽しさを伝えてきたこの学校の歩みをたどると、日本の大衆に水泳が定着していく過程の一部が見えてくるようです。

浜寺水練学校(以下、ハマスイ)の

誕生は1906年(明治39(注2))。

日露戦争の講和の翌年で、夏目漱石の『坊ちゃん』が発表された年でもある。欧米と肩を並べたという実感のもと、国民がさらなる発展を期待する明るい時代だった。

「日本人はもつと体を鍛えるべきだ。海に囲まれた国なのだから、泳ごう。当時はそんな国策があったんですね。『みんな泳げなあかんのや』と。それで毎日新聞社が、陸軍が管理していた浜寺の海岸を借り受け、水練場と海水浴場をつくった。そこで泳ぎの指導が始ま



浜寺水練学校の師範を務める吉村道和さん

ったのです」

そう語るのは能島流の第二十三代宗家であり、同校の師範を務める吉村道和さんだ。

毎日新聞社はこの水練場の開設を伝える社告で「平民的海泳練習所」という表現を用いている。当時、水泳は限られた人たちのもので、誰もが使えて泳ぎの練習ができる海はあまりなかった。初年度から1172人(注3)が参加したという活況からも、人々が泳ぎを通じた鍛錬の場を強く求めていた

2022

水練学校が伝えつづける泳ぎの哲学



多くの生徒と保護者が参加して行なわれた浜寺水練学校の開校式(2022年7月20日)

提供:毎日新聞社

(注1)
海賊泳法ともいわれる。能島村
上水軍がルーツで、後に紀州
藩に召し抱えられた歴史をもつ。

(注2)
正式に学校組織となったのは
1922年(大正11)。

(注3)
期間中の延べ人数。

(注4)
同校の初代師範・井上富造氏
が示した三訓
一、水を怖ることなかれ
二、水を侮ることなかれ
三、水に逆らうことなかれ

(注5)
昭和に入ると音楽に合わせて
演技するスタイルとなり、海外
に存在したシンクロナイズドス
イミング(当時)に近づいていった。

ことがわかる。
この頃の日本にはクロールなど
近代泳法は伝来していない。指導
は日本泳法に則ったものだった。
吉村さんはこう語る。
「明治以前の日本泳法は武芸のよ
うなもの。あまり門外には出さず、
限られた人が受け継いでいく技術
だったと思われます。水練場で子
どもを中心とした多くの人びとに
泳ぎを教えることになった先生た
ちは、どんな指導をすべきか、改
めて考えを巡らせたようです」
指導を担った人びとのなかには、
日本を代表するような泳ぎ手もい
た。彼らは大衆に泳ぎを教えるこ
とに誇りを持ち、強い情熱があっ
た。
当時の指導では速く泳ぐことは
重視されておらず、目指していた

のは泳げない子を泳げるようにす
ることだったという。ハマス伊が
《水泳訓》(注4)として掲げ、今も
大切にしているものの一つ《水を
怖ることなかれ》の精神を根づ
かせることに注力していた。
「砂浜を使ってカエル足の練習を
したり、浜寺の遠浅の海で身体
の浮かし方を教えたりと、自然環境
をうまく利用していたそうです。
そして、怖さを取り除き、水に浸
かる喜びを伝える。すると、すぐ
に楽しくなって自分からいろいろ
な泳法を覚える。海水なので、プ
ールよりはるかに動きやすかった
というのもあったと思います」
日本泳法が指導の基礎のハマス
伊だが、近代泳法もどこよりも早
く指導に採り入れていたのもおも
しろい。新聞社が母体であったた
め、情報を手に入れやすい環境が
あったからだとみられる。
また、ハマス伊の先進性を表す
ものの一つに、1925年(大正14)
より始まった「楽水群像」(注5)が
ある。これはシンクロナイズドス
イミング、今のアーティステック



ハマスィが戦前から行なってきた「楽水群像」。
これは日本泳法の浮身を応用した『花の形』。
1957年（昭和32）7月撮影

提供：毎日新聞社



2024

ハマスィが開校される大阪府営浜寺公園プールに隣接する現在の浜寺海岸

吉村さんは、楽しくも厳しく、厳しくも楽しい、そんなハマスィでの日々を振り返る。

「頭に手を乗せ、手を使わずに立ち泳ぎをずっとやるんですよ。余裕がありそうだと、先生が肩に手を乗せて負荷をかけてきてね。あれと比べると、普通に泳ぐのはどんなに長距離でも屁でもない。でも、厳しい先生たちも、合間にはみんな楽しんでる遊びをたくさん用意してくれました。最近は時間の制限もあって、そういう遊びが

時は流れ、戦中戦後の混乱期も

厳しくも楽しい ハマスィでの日々

スイミングの先駆けで、衣装を着た女性の泳ぎ手が合図に合わせ美しく泳ぐ団体演技である。立ち泳ぎのような日本泳法の技術と、アメリカ映画の演出などから得た着想がミックスされたユニークな演目は、1932年（昭和7）には宝塚のプールで2000人の観衆を集めて披露され、喝采を浴びた。神宮大会（現在の国スポ）でも演じられ、その名は全国に轟いたという。

生き残ったハマスィは、生徒を惹きつけつづけていた。そして迎えた転機が、1963年（昭和38）の海からプールへの移行だ。

「一番多かった頃は、6000人

もの人たちが参加していました。私を通ったのもその頃ですが、ものすごい数の子どもが校歌を歌い、準備運動をする様子は壮観でした。一方、工業化で沿岸の開発が進み、



昭和33年に長野で合宿を行なった
シンクロナイズドスイミング1期生



1クラス100名もの生徒で賑わった
昭和40年代

海での指導が難しくなりました。それで、大阪府が新たに建設した浜寺公園プールに移ることになった。海が前提だった指導も、大きく変わることとなりました」

遠泳の機会などが減り、砂浜であれば行ないやすかった足の動きの練習などもやり方が変わった。水泳が鍛錬からスポーツへと位置づけを変えるなかで、指導における近代泳法の割合も徐々に高まった。ふんどしで泳いでいた男児たちも水泳パンツを履くようになり、夏休みのほぼすべてを使っていた日程も短くなった。

「頭を振り返る。」「頭に手を乗せ、手を使わずに立ち泳ぎをずっとやるんですよ。余裕がありそうだと、先生が肩に手を乗せて負荷をかけてきてね。あれと比べると、普通に泳ぐのはどんなに長距離でも屁でもない。でも、厳しい先生たちも、合間にはみんな楽しんでる遊びをたくさん用意してくれました。最近は時間の制限もあって、そういう遊びが



海に浮かびながら休憩する生徒たち。これも「浮身（うきみ）」の大事な練習



昭和30年代の浜寺海岸で習熟度ごとに分かれて練習する生徒たち



能島流が泳法の基本とする「カエル足」を習うふんどし姿の生徒たち。砂浜ならばカエル足も指導しやすかった

減っているのは少しかわいそうですよね。もう少しみんなで馬鹿になれる時間があればね」

楽しかったのは海やプールだけではなく、帰り道に売店で買って食べたコロッケもよく覚えていて「おいしかったですよ。あのお店はコロッケで家建てたんとちゃうかな。子どもは全員食べていたからね」

水泳訓が指し示す 水と人との適切な関係

前述のハマスイの〈水泳訓〉は、〈水を怖るることなかれ〉の後に

〈水を侮ることなかれ〉〈水に逆らうことなかれ〉と続く。泳ぐ楽しさを説いてから、もう一度水の怖さと水の性質を説いている。

ハマスイには独自のシステムがあり、段階ごとの試験に合格し卒業すると、年齢に関係なく先生になれる。泳ぎが得意な吉村さんは、小学生ながら指導側に回っていた

が、こんな出来事に遭った。

「先生だけが参加する慰労会で遠泳をしたんです。最後尾を自信たっぷりに泳いでいたら、

突然現れた渦に巻き込まれた。もがくと、渦が逆転しはじめてそこから飛び出すことができた。必死に岩にしがみついたものの、引き波で身体がもつていかれそうになり傷だらけになった。あのとときの自分は、水を侮っていたし、逆らってしまったのだと思う。命を守る、ここそが水泳とするなら、大事

なのは〈水泳訓〉。これに尽きる」

怖れず、侮らず、逆らわない。水泳を誰もが楽しめるものにしたと思った人々の情熱で育ち、引き継がれてきたハマスイ。そこで貫かれる哲学は、人と水とが築くべき関係の真髄のようにも感じた。それゆえに、時代が変わり、水泳を取り巻く風景が様変わりしても、色あせることがないのだろう。

(2024年4月19日取材)



【身体教育・生活文化】





【生活文化・観光研究】

泳ぐだけじゃない?!

「海離れ」の今こそ海辺を考える

夏の季語にもなっている「海水浴」。家族や気の置けない友だちなどと、太陽に照らされたまぶしい海で泳いだ——そんな経験がある方も多いのではないのでしょうか。潮湯治から始まったとされる海水浴の歴史と未来について、海洋建築が専門の畔柳昭雄さんにお聞きしました。

海水浴の原点は 褌からの潮湯治

現在の海水浴客数は年間600万人ほどですが、ピーク時の1985年（昭和60）は約3800万人でした。その当時、高度経済成長を遂げた日本では、1960年代後半から大衆乗用車が登場し、道路網も整備されて「家族4人で海水浴」が流行しました。

海水浴の歴史を紐解くと、その源は潮湯治とされますが、実は褌にまで遡ります。伊弉諾尊が黄泉の国から帰って身を清めるために禊を行なったと伝わる宮崎県の御池は、位置的にはかつて海だった可能性が高い。つまり伊弉諾尊は海水を浴びた、海に身を浸したとも考えられるんですね。

褌のちに簡略化されて手水となり、水を浴びる行為も心身を浄化するという本来の意味から、体を洗い清める澡浴へと変わっていきます。そしてこの「浴み」が潮湯治へとつながるのです。

潮湯治には大きく2つの流れがありました。1つは海の水を汲んできて沸かして浴びるもの。平安時代の貴族はしばしば暴漢に襲われたので外出できず、屋敷や離宮に海水を運んで沸かして浸かっていました。のちに温泉地で逗留して湯に浸かる「湯治」に変わりますが、それになぞらえて海水に浸かることを潮湯治と呼んだのです。もう1つは、地域の習わしとして生まれた民間療法としての潮湯治です。愛知県常滑市の大野浦では平安時代から海に浸かって波を浴び、浜辺で甲羅干しをすること、日を何度も繰り返し行なっていました。江戸幕府二代将軍の徳川秀忠も腫れ物の治療で大野浦を訪れ、潮湯治を行なったと伝わっています。

語源は泳ぐではなく 「海の水を浴びる」

海水浴という言葉が登場するのは江戸後期でした。この頃には病の人だけでなく、健康な人たちも海に入って波と戯れるようになります。つまり潮湯治という言葉では説明がつかなくなり、海で水浴

び＝海水浴と呼ぶようになったのです。ただし、読みが「かいすいよく」なのか「うみみずあみ」なのかは判然としません。

幕末の医官、林洞海がオランダ語を翻訳するなかで海水浴も日本語にしたのですが、まさに直訳で海水浴。

英語では「sea bathing」です。

日本人は「sea swimming」じゃないの?」と思いますが、ドイツ語もフランス語も「泳ぐ」ではなく「浴びる」。た

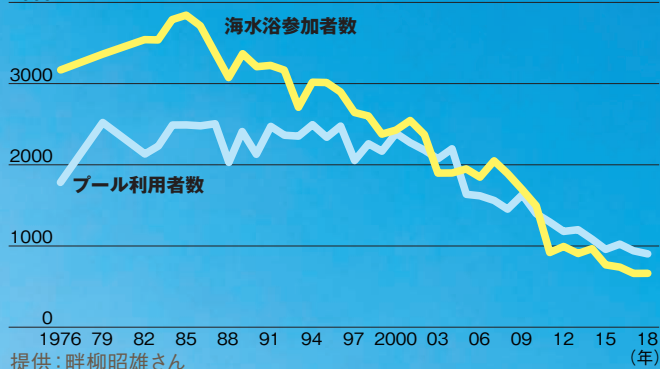
しかにヨーロッパの人たちは海辺で泳ぐよりも日光浴をするイメージが強いですね。1874年（明治7）にある新聞が「かいすいよく」とルビを振っていますが、しばらくは「うみみずあみ」と使い分けていたのでしょう。

明治時代になると、治療法としての海水浴に関心が高まります。

例えば後藤新平は『尾張名所図会』に描かれていた潮湯治・海水浴の人びとの姿に興味を募らせ、1879年（明治12）に愛知県の佐久島へ、翌々年には大野浦へ出向いています。科学的知見に基づく潮湯治・海水浴の近代化が必要だと考えた後藤は啓蒙書として『海水功用論 附海濱療法』を1882年（明治15）に出版します。明治

■ 海水浴とプールの利用客数の推移

参加数(人)



提供：畔柳昭雄さん

（注2）仮想的市場評価法

アンケート調査を用いて人びとに支払意思額などを尋ねることで、市場で取り引きされていない財（効果）の価値を計測する手法。

（注1）武芸十八般

武芸十八番ともいわれた。柔術、剣術、居合術、水術などが含まれるが、18種の呼称や種目などには諸説ある。

海水浴の価値

政府も衛生政策普及の一環として海水浴の普及に努めます。ところが「泳ぐ」という行為に関しては1888年（明治21）頃まで触れられていません。

武術の一つとなった海や川で泳ぐこと

泳ぐに目を向けて時代を遡ると、弥生時代から海部（または海人部）と呼ばれる集団がいて、海に潜って水産物を採取し、大和朝廷にも献上していたそうです。これはまさに生きるための技で、口伝や経験則で継承されたのでしょうか。

鎌倉時代になると、海や川で泳ぐことを意味する「水練」や「水術」という言葉が用いられます。武術としての技の研鑽と体系化が図

られていくわけです。泳ぎに長けていたとされる織田信長や徳川家康が家来たちに水練、水術を奨励したことは想像に難くありません。「武芸十八般」（注1）にも水術は含まれています。

ペリー来航などに刺激された幕府が1856年（安政3）に江戸の築地に設けた武術訓練機関「講武所」では、剣術や砲術に加えて水術も演習科目でした。同時に各藩が藩校や私塾を開く際に水練所を併設する動きも盛んになります。

明治時代に講武所や各藩の水練場は廃止されますが、古式泳法、今は日本泳法と呼ばれる古来の水術が有志によって水練所や稽古場が復活します。また、現在の学習院大学、東京大学、日本体育大学が相次いで水練所を開設。その多

くが隅田川河畔や浜町河岸（東京都中央区人形町）に集中しますが、隅田川の水質の悪化や大型貨物船の運航開始などから1917年（大正6）に警視庁が隅田川の水泳禁止を発令。水練場は上流部の荒川、海に近い河口部、海に面した大森や羽田へと分散していったのです。

自然と親しむ場として海と海辺に注目を

翻って現代に目を転じると、「海離れ」「海水浴離れ」と言われて久しいです。海で泳ぐと体がベタベタする、砂がつく、道路が混むなどの理由で海水浴が避けられる傾向にあります。

しかし、「泳ぐ」行為だけで考えれば決して激減しているわけではありません。ナイトプールや有料のウォーターパークもある今、海水浴客数とプール人口を合算すればまだ2000万人近い人びとが泳ぎを楽しんでいるのです。

むしろ監視員や費用が工面できず開設を見送る海水浴場が増えていくことが気になります。仮想的市場評価法（注2）を用いて海水浴場の使用料を調べたところ、「一日500円なら払う」という結果が出ました。ならばそれを海岸整備やごみ処理にあてればよいのです。

地元の人なら行かない危険な場所です。泳いで事故に遭うことが増えているのは、海辺が遠い存在になってしまっているからです。

薬に頼らず健康になるために海水浴を奨励した後藤新平をはじめとする明治期の人たちは、海水の科学的成分や物理的効能以外にも海砂浴や海気浴を勧めていました。そこに立ち返ってはどうかでしょう。春は潮干狩りを、夏は泳いで日光浴を、秋は波打ち際を散歩して疲れたらコーヒーを飲みつつ海を眺める——海水浴だけではない、自然と親しむ場として海と海辺に目を向けてほしいですね。

（2024年4月26日取材）



江戸時代後期に描かれた『尾張名所図会 尾張大野潮湯治の図』。海に入っている人びとは腰まで浸かっているだけで何もしていないように見える。この頃は海に入ること自体が珍しい行為だったのだろう。浜辺では甲羅干しする人びとの姿もある 提供：愛知県図書館



【生活文化・観光研究】



【生活文化】

今回の特集を立案するために話し合っていた時、メンバーから「漁師さんでみんな泳げるんだよね？」という素朴な疑問が出ました。「そりやそうでしょう？」でもテレビで『泳げないけど漁師になった人』のことを取り上げていたよ？」「じゃあ、聞いてみようよ！」千葉県房総半島南部を巡り、海辺で生きてきた人たちに「泳ぐこと」についてお聞きしました。

漁師さんはみんな泳げるの？

南房総の
人びとに聞いた、
海辺の暮らし

川の水は重くて
泳ぎづらい
「海の子」と「山の子」の違い

昼 ときに地元の人が店前にいたので「絶対にいい店だ」と訪ねました。地の魚を用いた料理を提供する「京や」。アジフライ定食は絶品です。館山市に店を開いて61年目。女将さんは素潜りの名手でした。

出 身は白浜町（現・南房総市）です。家から海までは歩いて5分。小学校に入る前にはもう海で泳いでいました。中学生になっても友だちと二人で海に潜って貝を探っていましたね。今はダメだけど、その頃は家が権利をもっていたら子どもも魚介類を採れたんです。

小学校にプールはありませんでした。水温28℃くらいになると海で水泳の授業です。泳ぎを教わるというよりは遊び。勉強よりずっと楽しかったです。おもしろかったのは水泳大会。先生たちがスイカやトマト、ウリなんかを海に投げ込んで、それを取りどもたちが取



野口 博子さん
飲食店経営
（館山市）

り合うんです。家に持って帰れるのもう取り合いですよ。海のそばに住んでいる子の方がたくさん取っていました。

クラスの半分は海そばの子で、あと半分は山の方に住む子でした。7月になると海の子はテングサを、山の子はフキをそれぞれ学校に持ってきては先生が換金して学校用の置き傘を買って、みんなそれを使っていたんです。

山の子はあんまり泳げなかったですね。私の義理の弟はすぐそばの富浦出身ですが、山の方に住んでいたのだから海に行っても膝下くらいの深さまでしか入りません。やっぱり海が怖いんですね。

山の子は川で遊んでいましたが、逆に私は川が苦手。泳いでも水が重くて進まなくて泳ぎづらいんです。それはプールも一緒。だから泳ぐならやっぱり海がいいです。

海は体が浮きやすいから、潜

って貝を採って疲れたら仰向けになってグラーッと浮きました。どうやって浮くのかって？小さい頃から泳いだから遊んでいるうちに自然とできるようになったね。

ただし、海は怖いこともあるので潜るときは必ず二人で行きました。それでもやっぱり海はいいですよ。この前、うちの店で小学校の同窓会を開きました。みんな長生き！特に女性は元気です。潮風が体にいいんでしょうね。

館山市にある洲崎灯台



ちやんとは泳げないけれど 溺れはしない 70歳から始めたプール通い



鋸 南町の勝山漁港で一人の男性
に出会います。息子さんたちが
操縦する遊漁船の帰りを待っている
ころでした。「漁師さんはみんな泳げ
るのですか？」と尋ねると、興味深い
答えが返ってきたのです。

こ 鋸南町の漁師の家に生
まれました。私も漁師で
したが、年々魚が少なくなるな
ど将来の水産資源が心配になっ
たこともあって遊漁船に切り替
えました。今は二人の子どもが
跡を継いでいます。

漁師はみんな泳げるのか泳げ
ないのか……。難しい問いです
ね。ちやんとは泳げませんけれ
ど、溺れない程度には泳げます
海に飛び込んで岩場まで行った
りちよつと潜ってサザエを採る
くらいはみんなできる。そうい
う感じです。



とも い 艦居 進さん(89歳)元 漁師
「初代新清丸」船長(鋸南町)

でも平泳ぎはすぐにできるよ
うになりました。水に頭を浸け
ると体が浮いて、頭を水面に上
げると身体が沈みますよね。そ
れを交互にやった。見様見真似
でも25mはなんと
か泳げました。

平泳ぎだと腰が
痛くなったのでク
ロールに切り替え
ました。独学です。
水に顔を浸けたま
まクロールして、時々呼吸もし
ての繰り返し。週に2回プール
に通って25mを7〜8本泳ぎ、
あとは水中ウォーキングです。
ずっと続けたかったんですが、
数年前に腸を手術してからお腹
の調子が悪くて、医者相談す
ると、温水でも体温よりは低い
から腸を冷やしてしまうかもし
れない、と言われたので通うの
をやめました。

今年の秋で90歳ですが、肩も
手も腰も足も痛いところはあり
ません。水に浮かんで泳ぐから
筋肉や関節がほぐれたんでしょ
うか。元気なので年下の人たち
に健康の秘訣をよく聞かれます
が、「泳ぎはいいよ」と
勧めています。



海で泳ぐなら平泳ぎ一択

— クロールは息継ぎが難しい



漁 師から釣り船経営に転じた父、鱸居進さんの跡を継いで、弟と二人で遊漁船「新盛丸」を切り盛りしている正悟さん。学校にプールがあるのは当たり前となつた時代に育つた50代の海への思いとは？

漁

師から遊漁船経営に転じた父（鱸居進さん）の跡を継ぎ、弟と二人で船を2艘操つて釣り人たちを日々案内しています。

海で泳ぎはじめたのは小学生になるかならないかくらいの頃ですね。まるで犬かきのような平泳ぎで。教わったわけではなく、人が泳いでいるのを見て自然にです。

同級生で泳げない子はいなかったはずですよ。私が通っていた小学校にはプールがありました。平泳ぎはできたので、水泳の授業でクロールを教わりました。

泳ぎを習って変わったことですか？

犬かきのような平泳ぎが速くなりましたね。クロールもできますが、海は波があるので息継ぎが難しい。だから海ではずっと平泳ぎ。海なら体は浮くけれど、プールは体が浮かないんですよね。海が風いでいたらそれこそ何時間でも体を浮かべられます。

この海も子どもの頃とはだいぶ変わりました。こんな大きな漁港はなくて、岩場と砂浜が組み合わさった遊びやすい海だったんですよ。先輩や後輩と岩場まで競争したりしていました。

私にとって海の水とは、「スパゲッティを茹でる時は海の濃さ」。海水の濃さと同じくらいになるように、塩を入れるんです。料理は手づくりじゃないと食べてくれない娘も「塩加減は海の濃さ！」とよく言っています。



ともい
鱸居 正悟さん (57歳)
遊漁船「新盛丸」経営 (鋸南町)

新盛丸
〒299-2117 千葉県安房郡鋸南町勝山273-1
<https://sinseimaru.com/>



(上) 館山市周辺の海で採れるテングサの干し場。取材時はちょうど採取と乾燥のシーズンだった
(左) 洲崎灯台そばの商店で提供する、地元のテングサでつくった「ところてん」。房総南部ならではの一品

海では「速さ」より「潜り」が大事

ずっと海で遊んでいた少年時代



赤沼 竜義さん(22歳)
遊漁船「赤沼丸」船長(館山市)

最近は「海離れ」「海水浴離れ」が進んでいると言われますが、海辺で暮らす若者もそうなのでしょうか？ 館山市洲崎^{すのさき}の浦漁港でルアー釣りをメインとする遊漁船「赤沼丸」を操る若き船長にお聞きしました。

もともと漁師でしたが、船の権利を譲っていただいてから父と兄と3人で遊漁船を動かしています。

生まれた家はすぐそばなので、泳いだのはプールより海が先。シーグラスを集めたり、釣りをしたり、水中メガネをつけて魚を釣^{もち}で突いたり貝を採ったりしていました。学校にはプールがありませんでしたが、楽しいのは断然海です。

どうやら無鉄砲な子どもだったようで、親の目を盗んでは勝手に海に入って何回も溺れて、そのたびに父に助けられていたそうで、今でもよくからかわれます。

泳ぎは自己流です。浮き輪につかまって兄に付いていったので、自然とバタ足とか覚えて泳げるようになったんじゃないかな。兄は「ここから先は来るなよ、足がつかないからな」と教えてくれました。学校で海に泳ぎに行くことはなくて、遠泳もなかったです。まったく泳げない友だちもいませんね。

漁師は速く泳げるよりも、潜れるかどうかの方が重要です。プールでいくらクロールが速くても、深く潜れるかどうかはまったく別の話です。潜るには、息のつき方も耳抜きも必要で、しかも泳ぎ方はまったく違うんです。

潜るとき、息は少しだけ溜め、頭を下げてスツと海に入っていきます。足は力まずヒラヒラと動かして潜っていくんです。足をバタバタさせて潜ろうとする人がいますが、そうすると息が続かなくて海底に長く留まれません。漁師は年々少なくなっています。

ですので、若い人たちに海に来てもらって海の仕事に興味をもってもらいたいのですが、ごみを置いて帰ってしまう人とか遊泳禁止の場所ですぐ泳ぐ人とかいるんです。遊泳禁止の場所にはないから理由があるものですが、海はたとえ天気がよくても急に潮が速く動くときがあったり、台風が遠く離れていてもうねりが出ます。だから泳いでもよい場所、気をつけながら海で遊んでほしいですね。



赤沼丸
〒294-0316 千葉県館山市洲崎88
<https://akanuma-maru.com/>

内陸育ちとは異なる「泳ぐ」の定義

房総半島南部の海で育った、年代や性別が異なる4人にお話を聞くと、海が近くにない場所ですぐ育った場合とは「泳ぐ」の定義が違うことを感じました。鱸居進さんが言っていた「ちゃんとは泳げないけれど、

溺れない程度には泳げる」が真実なのでしょう。ちゃんといふのは近代泳法を指しますが、物心つくかつかないかのうちに海で泳ぎはじめると、見様見真似でなんとなく泳げるようになっていくそうです。

海の方が体は浮いて泳ぎやすいという声も多かったです。川やプール、つまり淡水で泳ぎにくいのは、野口さんの「川の水は重たい」という表現によく表れています。

海で仕事をする際、速く泳

げるかどうかよりも「深く潜れるかどうか」が重要という赤沼さんの指摘も新鮮でした。少しだけ潜るコツも教えていただいたのでこの夏に試してみたいものです。

(2024年5月13日、16日取材)



いつまでもあると思うな、

学校プール

これからの水泳授業を考える

インタビュー
福嶋尚子さん

千葉工業大学 工学部 教育センター 准教授

FUKUSHIMA Shoko

新潟大学大学院教育学研究科修士課程を経て
東京大学大学院教育学研究科博士課程。2015
年より千葉工業大学助教(のち准教授)。2016年
博士号(教育学)取得。教材教具整備・財務にかか
わる学校基準政策など学校経営改革について、
現代的視点と歴史的視点の両面から研究。著書に
『占領期日本における学校評価政策に関する研
究』、共著に『隠れ教育費——公立小中学校でか
かるお金を徹底検証』『教師の自腹』がある。





50m走は遅いのにクロールが上手な同級生にびつくりしたり、消毒のために浴びるシャワーや腰洗い槽の冷たさに体を震わせたり、小中学校のプール授業には意外と思いがちが多いもの。ところが今、プールを廃止する学校が増えつつあるそうです。これからの学校プールと水泳教育をどう考えればよいのか、福嶋尚子さんにお尋ねしました。

減りつつある 小中学校のプール

近年、公立小中学校のプール施設を廃止し、近隣校の施設を利用したり、民営プールに指導ごと委託したりする動きが広がっています。「我が国の体育・スポーツ施設——体育・スポーツ施設現況調査報告——」（スポーツ庁・2023年5月発表）によると、2018年当時の公立小学校の屋外プール設置率は94%、中学校は73%でしたが、2021年には小学校87%、中学校65%まで減少しています。

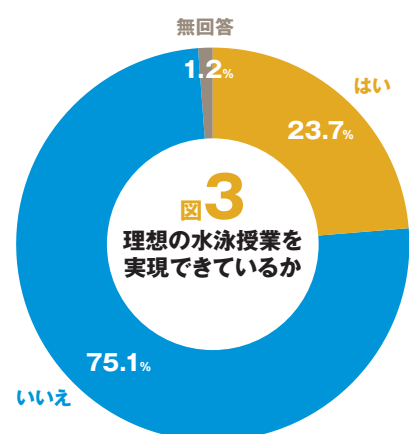
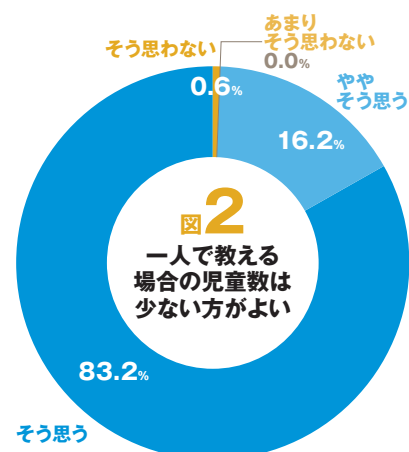
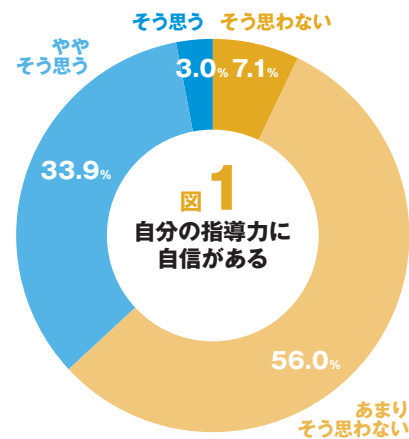
あたりまえのようにあった学校のプールがなくなってしまう。そのことをセンセーショナルに報道する向きもありますが、ここは冷静に学校プールの現状と水泳授業の意義を見つめ直したいものです。そもそも学校で水泳を教えるようになった大きなきっかけは、1955年（昭和30）5月に起きた紫雲丸沈没事故だとされています。泳ぎ方を知らない子どもが多数犠

牲になったこの事故を教訓に、水難事故を防ぎ、安全に水と親しむための水泳の授業が広まってきました。

一方でほぼ同じ時期、東京オリンピックに向けて競技水泳への関心が高まり、1961年（昭和36）にスポーツ振興法が制定されると、国の補助金を使って一気に全国の小中学校に屋外プールが普及していきます。これに伴い、水泳授業は水難事故から身を守るという目的から、距離や速さを競う泳力、泳法重視の指導へと傾いていきました。

教員にのしかかる 多大な負担

ここで問題なのは、必ずしも小中学校の教員が泳ぎの専門家ではないことです。泳力重視の授業をするのであれば本来は教員に研修を受けさせるか、専門家に指導してもらい必要があるでしょう。しかし、公立学校にそうした予算はないので、泳ぎに関しては専門外



出典:佐藤友音・池田拓人(2019)「小学校体育における水泳授業の実態に関する研究―目標・内容・方法に着目した課題の抽出―」和歌山大学教育学部紀要 教育科学 第70集 (2020),pp.109-116. (グラフは編集部作成)

の教員が水泳指導を行なうことがほとんどです。ある研究では、小学校教員の6割以上が水泳指導に自信がないと回答しています(右図)。

さらに、水の事故を防ぐという目的からすると皮肉なことですが、学校の活動のなかでも水泳中の事故は重大事案につながりやすい。つまり教員は数十人の子どもの命を預かり、安全に配慮するという重責を担うことになります。

さらにプールの維持管理もまた、教職員に任されています。シーズン前の水槽の大掃除に始まり、毎日の点検や水質チェック、薬剤投入、あるいは子どもたちの健康状態の確認など、水泳授業を行なうための業務は煩雑です。万が一、何かが起きた際には、管理責任を問われることもあるのです。実際、プールの水を出しっぱなしにした教員が自治体から損害賠償を請求されるというニュースも話題にな

りました。

教員が置かれている現状を考えると、今の公立学校教育のしくみのなかで学校プールを維持しつづけるのは、かなり無理があるように思われます。

見直しのきっかけは 経年劣化とコロナ禍

では、なぜ今のタイミングで学校プールの見直しが進んでいるのでしょうか。その理由の一つが施設の老朽化です。1960年代に大量に造られた屋外プールは50年以上を経て劣化しており、建て替えか、大規模な改修が必要です。しかし、プールの建て替えには億単位のお金がかかるとも言われ、また維持するにも費用がかかります。学校によってはまだトイレが和式だったり、教室にエアコンが設置されていないかったりするなか、

わずかな期間しか使わないプールを優先することが妥当なのか、多くの自治体が検討を始めたのです。

また、コロナ禍も大きな契機になりました。コロナ禍では学校の行事や活動は著しく制限されましたが、その結果、各学校で従来の教育内容の見直しを行ない、コロナ禍後も運動会を半日行事にした、卒業式の来賓挨拶を省くといったスリム化を進めています。

その流れで見ると、水泳の授業は時間と労力がかかるうえ、天候にも左右される。水泳がなくなればそのリソースを他の運動や教育活動に充てられ、プールの維持管理や水泳授業における教員の負担も軽減されます。小学校では今、英語やプログラミング教育が必修になり、ほかに教えるべき項目が増えています。その分、何らかの教育活動を減らす必要があり、教員の働き方改革の観点からも、





負荷の大きい水泳が今、その候補に挙がっているわけです。

これからの水泳教育に必要なのは「対話」

今後、これまであたりまえだった1学校1プールを維持するのは難しくなるでしょう。これからの水泳教育は、水泳の授業とプール施設を切り分けて考えることが大事だと思っています。

水難事故を防ぐという目的に立ち返れば、学校にプールがなくても適切に指導する方法はあるはずです。実は学習指導要領において水泳の実技指導は必修ではありません。小中学校とも「適切な水泳場の確保が困難な場合にはこれを扱わないことができるが、水泳の事故防止に関する心得については必ず取り上げる」とあります。

私は新潟市内で育ちましたが、近くを流れる阿賀野川は水量が多く、泳ぎが達者でも危険なので、誰も近づこうとはしませんでした。大河川の多い新潟は洪水などの水害が昔から多く、子どもたちは水の危険性を学校や地域の人に教わっています。水との関係性はその土地によって異なるわけで、地域ごとに授業の内容は違っていいの

かもしれません。ICTが発達した今だからこそ、実技がなくても動画やCGを使って、水の危険性や注意点を効果的に教えることは可能です。

ただし、水と安全に親しむ機会として水泳の実技授業の意義は大きく、プールがないためにそれが受けられない状況は好ましくありません。理想的な解決策は、各校のプールを廃止する代わりに自治体が公営プールを新設し、近隣の学校が順番に利用する形でしょう。授業以外の時間帯を地域住民に開放すれば効率よく活用できます。

もちろん個々の自治体で状況は異なり、そう簡単に実現はできないでしょう。さらに学校プールは、地域の消防水利や生活用水としての役割を担っている場合があり、学校の事情だけでプール存続の可否を決定するわけにもいきません。そこで今必要なのは、さまざまな立場を超えた対話だと思います。学校、保護者、自治体、地域などが学校プールの現状に関する情報を共有し、問題点を把握したうえで、子どもたちにとって有用な水泳授業のあるべき姿を一緒に考えていくことが大切ではないでしょうか。

(2024年4月10日取材)





【身体教育・社会学】

泳ぎ方が？ 「水府流水術」を訪ねて

日本には連綿と受け継がれている泳ぎ方があります。川や湖、海など地域それぞれの水域に適した形で発達した「日本泳法」です。現在は13の流派が存在します。そのうちの一つ、茨城県水戸市で継承されている「水府流水術」の歴史的背景をお聞きし、泳法の一部を見せていただきました。



年齢にかかわらず 生涯続けられる

横向きで水面から顔を出し、足は水を挟み込んで押し出すような「あおり足」で進む。下の手を水中で前に伸ばし水をかく。茨城県水戸市に江戸時代から伝わる日本泳法の一流派、「水府流水術」の代表的な泳法の一つ「一重伸」だ。

水府流水術協会が、「子どもたちと成人を対象に毎週、那珂川べりの青柳公園屋内プールで水府流水術の教室を開いている。

同協会の榎村幸治さんは水戸市水府流スポーツ少年団の団長として子どもたちを指導する。榎村さんはスイミングスクールに通って競泳選手を目指していたが、小学校4年生のときに断念する。競泳をやめたことを知った担任の教師に日本泳法大会への出場を勧められ、水府流水術を始めた。

「他の運動はダメでしたが泳ぐのだけは得意でしたし、また水泳が続けられると思って。日本泳法は競泳と違いタイムを競うものではありませんから、水府流も年齢を問わずにできる生涯スポーツです。42年続けていますが、まだ極めたとは思っていません」と微笑む。

なぜ

180種もの 日本泳法の一流派



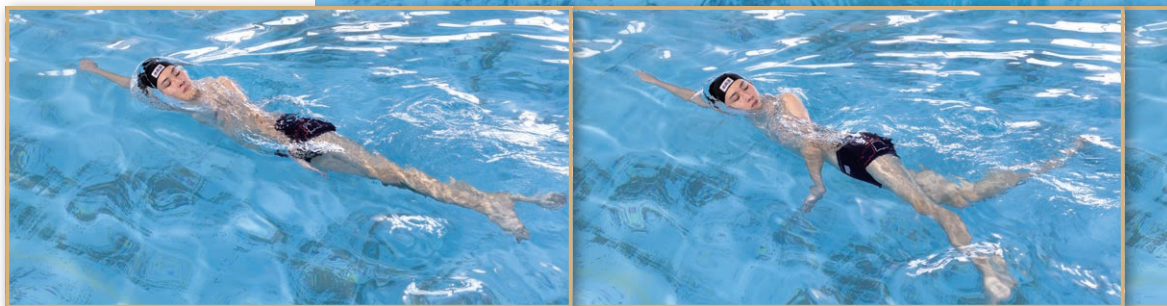
1 那珂川のほとりにある「水府流水泳道場跡」の石碑。上流と下流では流れの速さが異なるため、泳法にも違いがあった 2 水府流水術を育んだ那珂川。かつてはもっと遠浅で、川のなかほどまで立ち込むことができたという 3 水府流水術協会の榎村幸治さん。水戸市水府流スポーツ少年団の団長を務める 4 水府流水術の教室に参加している子どもたち。これからの日本泳法の担い手となる



一重伸

一重伸 ひとえのし

水府流水術の代表的な泳法の一つ「一重伸」。体が上下動せず伸びが長い、ゆったりと余裕のある泳ぎが理想とされる



城下町の水戸は北に那珂川が流れ、南に千波湖が広がり、東の太平洋も遠くない。水戸という地名が表す通り、「水の出入り口」となる土地だ。しかも江戸時代の千波湖は今の5倍の大きさだったという。したがって、国を守るためには戦国時代から「水術」に長けた人材が必要だった。「橋などないですから合戦で伝令を走らせるのに川や湖を泳げなければ役目を果たせません。古くから水泳が発達したのは地理的要因がまず大きい」と話すのは水府流

国を守るために必要だった「水術」

日本泳法大会は、全国各地の日本泳法の流派が集い、「形」で競い合う得点競技が中心の大会だ。水府流水術の場合、「伸し泳ぎ」を基本とし、横向ききの「横泳ぎ」、平泳ぎに似た「平泳ぎ」、立ち泳ぎの「立体」、さらに「飛込」「潜水」「浮身」に大別されるが、細かく分けると180種類に及ぶ。なるほど一生をかけて極めるに値する泳法だ。それにしても、なぜ180種類もあるのか。その謎は水戸の土地と歴史に潜んでいる。



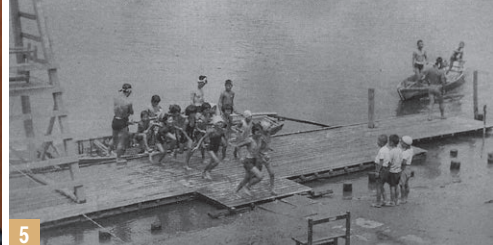
甲冑およぎ

榎村さんが披露してくれた「甲冑およぎ」。水府流水術の場合、鎧と兜のみならず袴をはき、籠手や脛当も装着しているので裸身に比べて20kgほど重くなる。難易度は高いが榎村さんは見事に泳いで見せた。左半身を上にして泳ぐのは脇差を落とさないため

甲冑およぎ



5 1956年(昭和31)の水府流水術の稽古場風景。かつてはこのような稽古場がいくつもあった 提供：水府流水術協会 6 水府流水術協会会長の山口伸淑さん(右)と副会長の荒川伊望さん(左)



水術協会会長の山口伸淑さん。

徳川御三家の一つとなった水戸は「水府」と呼ばれた。初代頼房、二代光圀以来、代々の藩主のもとで水泳術が発達する。「為政者の庇護・奨励と、泳ぎを指導する人的資源の豊かさも、水府流水術が長く継承されてきた要因です」と山口さんは明かす。

180種類の泳ぎの型には、それぞれ理由がある。例えば横体の「たぐり伸」は、張り渡した綱をたぐりながら泳ぐ伸し泳ぎだ。立体の「両拔手」は、水面から飛び上がって少し先を見たり、船べりや岸辺・小岩に飛びつく際の動きを形にした泳法。底が浅い、流れが急、障害物が流れてくる——川

や湖の佇まいは場所によって異なり、なおかつ移り変わる。また、武器や荷物を身に着け運びながら泳ぐ必要もあった。「自然環境や目的に合った泳ぎ方が根付き、少しずつ変わりながら伝承されたのだと思います」と山口さんは言う。

多様な環境の水域に囲まれた水戸という土地で、身を護り安全に水を渡るための泳法が豊富なバリエーションを生んだのは、当然の成り行きだったに違いない。

継承の場はプールへ 遠泳大会も復活

明治時代の廃藩置県後と終戦の直後に一時的に中断されたのを除

き、水府流水術の教習は途絶えたことがない。「水質汚染により那珂川で泳げなくなった1963年(昭和38)頃までは、川べりの水泳場で教えていました。ピーク時には7つの水泳場に生徒が6000人以上いました」と山口さんは振り返る。

那珂川の水泳場が順次、閉鎖になったのは、ちょうど小学校にプールが設置されはじめる時期だった。1970年(昭和45)には、青柳公園に東洋一といわれた6面の巨大な屋外プールが完成した。同年、主要な水泳場の師範が大同団結し、那珂川で練習できなくなっても水戸に伝わる日本泳法を後世へ受け渡すべく、水府流水術協会



取材や撮影にご協力いただいた水府流水術の教室参加者。都内など県外から毎週訪れる人もいる

が設立された。こうして水府流水術の指導はプールで行なわれるようになる。

しかし、那珂川でまったく泳がなくなったわけではない。1947年(昭和22)から5カ所の水泳場の主管で毎年開催されていた「那珂川遠泳大会」は、1963年に中止されたが、河川環境の改善により、1991年(平成3)から再開された。水府流水術協会も主催団体の一つだ。千歳橋から水府橋までの3・5kmを平泳ぎ、横泳ぎで隊列を組んで泳ぐ。

同協会副会長の荒川伊望さんは遠泳大会についてこう話す。

「参加者には水府流水術の練習生も多いです。どこが深くて流れが速いかを熟知した指導者が安全の

立泳



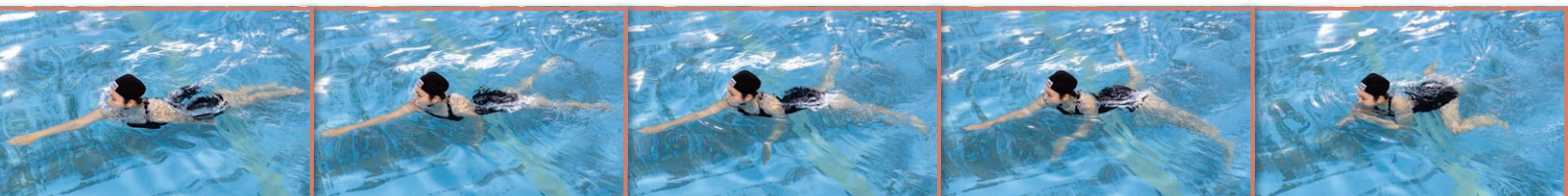
立泳 たちおよぎ

水底に足をつくことなく静止する「立泳」。水府流水術には踏み足、あおり足、巻き足などいくつもの形がある

小拔手 こぬきて

数ある水府流水術の泳法のなかで、もっとも動作が速くリズムカルに泳がなければならぬため、修得が難しい泳ぎの一つとされる「小拔手」。クロールに似ていてバタ足も使うが、左右交互に小さなあおり足を素早く使うのが本来の泳ぎ方

小拔手



平伸



平伸 ひらのし

一重伸を平体(水面に対して平ら)にした泳ぎ方。平泳ぎにも見えるが、顔は上げたままで、足はあおり足で進む。海藻や藻がある浅瀬を泳ぐときに有効な泳法



亀浮

亀浮 かめうき

頭と両手両足を水面から出す「亀浮」。浮身の一種で、その名の通りカメが甲羅から頭や足を出す姿に似る。自分の体の重心をきちんと把握し、脱力も必要な浮身は実に難しい。水府流水術には「浮身36体」と呼ばれる36の形を中心とするさまざまな浮身がある



ため伴泳し、船で先導します。小学校4年生から参加できて、80代の方も泳がれたことがありますが。水面から土手や空を見上げると、とても気持ちがいい。川を泳いで初めてわかる醍醐味です」

水府流水術協会は公営プールや小学校での指導のほか、日本泳法大会への出場に加え、審査委員など運営にも携わる。「会員が何かしらの役割を担い、日本泳法の普及に貢献しています。泳ぐだけではなく、さまざまな社会的な経験ができるのも『生涯スポーツ』たるゆえんです」と山口さんは話す。

継承の場は川からプールに移ったが、「流れ遠およぎ」として江戸時代に始まった那珂川での遠泳は今も続く。さらに、水域に応じて育まれた日本古来の泳法は、時代を超えて今なおそれぞれの地域で受け継がれている。

(2024年5月12日取材)



【身体教育・社会学】



日本最後の 清流で育った 川ガキたち



【生活文化】

日本には、川で魚を捕まえたてり橋や岩場から川に飛び込んだりする「川ガキ」の文化が昔からあります。「日本最後の清流」と称される四万十川では「沈下橋から飛び込むときは上流へ」など川で遊ぶ時の知恵が文化として継承されていると聞いて高知県を訪ねました。

先輩たちに教わった 川遊びの楽しさ



佐竹 貴子さん

株式会社 四万十ドラマ・広報
(四万十市中村地域)

地 地域の魅力を広める会社で広報を務める佐竹貴子さん。子どもの頃は沈下橋（注）からよく飛び込んだそう。夏休みに自転車を通ったという高瀬沈下橋でお話を伺いました。

橋からよく飛び込んでいました。浮き輪にお尻をすっぽり入れて、流れに身を任せてどこまで行けるか試す遊びも好きでしたね。「ここは流れが急だから危ない」「飛び込むならここがいい」など、川遊びの先輩たちからいろいろなことを教わりました。

ここに吸い込まれてしまつて、中学生のお兄さんに助けてもらったんです。家に帰つてそのことを母に話すと、ケロツとしていました。今でこそ危なくてゾツとしますが、当時は濡れかけて泳ぎを覚えていくみたいなのころはありましたね。

今は学校が夏休みに入つても、子どもだけで川に行くことが禁止されています。そうなる親が教えない限り川遊びを覚えなないので、川で遊ぶ子どももずいぶん減つたと思います。少し寂しいですね。

小 学校4年生のときに、中村市現・四万十市の市街地から四万十川がすぐそばを流れる地域に引っ越しました。それまでは泳ぐのが苦手で、学校のプールの授業は毎回憂鬱でした。転校先ではみんな泳ぎが上手で、夏休みになると毎日川に泳ぎに行っていたので、私もついに行くようになったんです。そこで近所の中学生に泳ぎを教わつてからは楽しくなつて、沈下

夏の川は涼しくて気持ちいいですが、長く泳いでいると体が冷えるので、しばらく泳いでは岸に上がつて休むことも自然と覚えました。中学生になつても夏休みには毎日川に行つていたので、みには毎日川に行つていたので、家でクーラーにあたつて涼んだ記憶はほとんどありません。まだ川で泳ぎはじめて間もない頃に、一度だけ溺れかけたことがありました。流れの速いと

① 佐竹さんが子どもの頃に遊んだ高瀬沈下橋から見た四万十川

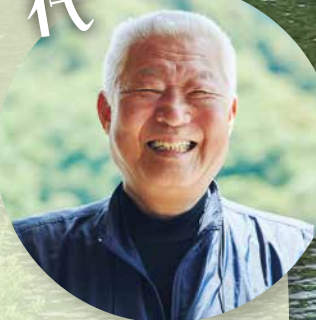
② 岩間沈下橋を渡る男性と柴犬（背景写真も岩間沈下橋）

③ 取材中に会った川で遊ぶ「川ガキ」の女の子

1

川で安全に泳いで
遊ぶ知恵の伝承

代々伝わるルールを守り やんちゃに遊んだ川ガキ時代



たいすけ
林 大介さん(65歳)
道の駅「よって西土佐」駅長
(四万十市西土佐地域)

林 大介さんが駅長を務める道の駅には、四万十川流域の産品がずらりと並んでいます。とても楽しそうに川ガキ時代を振り返る林さんの笑顔に、大らかな人柄がにじみ出ていました。

出

身は西土佐村(現・四万十市)で、子どもの頃は家の近くにあった長生沈下橋^{ながおき}の周辺が遊び場でした。泳いだり釣りをしたり、当時はまだ冬に雪が積もったので、ダンボールと竹でソリをつくって河原でソリ滑りもしました。とにかく一年中、川で遊んでいましたね。

小学生の頃、大水(注2)のときにもどうしても沈下橋を渡ってみたいくて友達と一緒に渡ったところ、遠くで見ていた親に大目玉を食ったこともあります。やんちゃな川ガキだったので、川遊びで親に叱られるの

はつきりものでした。

私が小学生だった昭和40年代は、川遊びに関して上級生から教えられたルールがありました。低学年、中学年、高学年で行ける範囲が決まっていたので、5・6年生になれば対岸まで横断できるといふルールでした。今思えば私が低学年の頃は、いつも上級生が川で遊ぶのを見守ってくれていましたね。

また、「川は場所によって流れが違う」「流心に行くほど温度が下がる」「台風が来ると川底の地形が変わる」といったようなこともすべて上級生に教わりました。私も下級生に同じように伝えていましたよ。そうして川は楽しくもあり怖いものでもあるというのを、遊びのなかで自然とみんな覚えていったように思います。たまに川の渡り方を知らないで育った若い人が、

川遊び中に命を落とすニュースを見ると心が痛いです。

川は流れがあるのでまっすぐには泳げません。狙った地点へ泳ぐには、30mくらい上流から流れに身を任せてゆっくり泳ぐんです。そうすれば体力を消耗せずちょうどよいポイントに着きます。

今は川遊びが必要以上に制限され、川本来の価値が薄れつつありますが、四万十川の澄んだ水の美しさは昔とほとんど変わっていないように思います。大切な地域の宝です。



3

(注2) 大水

大雨や台風などで河川があふれて多量の水が流れ出ること。

(注1) 沈下橋

増水時に川に沈んでしまうように設計された欄干のない橋のこと。欄干があると流木などが引っかかり水の流れが悪くなって氾濫がよりひどくなる可能性がある。



2

夏は「アユ」中心で日々を暮らす矢野健一さんは、地元で茶農家も営む現役の川漁師。四季を通じて川とともに生きる四万十川大好き人間の矢野さんが、小学生の頃に泳いでいたという「プール」に案内してくれました。

通

つていた小学校（四万十町立広井小学校。現在は閉校）にはプールがありませんでした。だから夏の水泳の授業は毎回この四万十川。まさにここが「学校のプール」でした。目標物になる岩もあって、もし溺れても少し下れば岩に引っかかります。深さもあまりないので、大人なら歩いて渡れるととてもいい場所なんです。

当時、僕らの小学校では上級生が2〜3人いれば川に遊びに行ってもいいという決まりで、夏休みになると川は遊び場でした。泳ぎも最初は犬

かきから始まって、クロール、平泳ぎ、バタフライと上級生を見て覚ええました。昔はこの親も農作業などで忙しかったので、いろんなことを上級生から教

わりましたね。今考えると無謀にみえる遊びでしたが、痛いことも怖いことも、理屈や理論ではなく体で覚えていった感覚です。それでも、当時川で命を落とした人はいませんでした。

僕は現役の川漁師ですが、父もそうだったので、子どもの頃に川で遊んでいると父がよく漁をしていたんです。その様子を間近で見て、アユの釣り方やウナギを捕るための「コロバシ（注3）」の仕掛け方、潜り方など漁に必要なことも学びました。

今でも川にすることがほとんどですね。特に夏は泳ぐと連絡わ漁もするわけで、まったく連絡

が取れない」とよく言われます。おかげで体は健康。以前は関東地方で働いていたこともありましたが、川の近くで暮らしたくて戻ってきました。水たまりを見ても「魚がおらんかな」と見てしまうんですよ。

学校のプールが「四万十川」 今も川が遊び場で仕事場



矢野 健一さん(52歳)

川漁師・茶農家
(四万十町十和地域)



小学校時代、矢野さんが水泳授業を受けた場所



4



5



6

(注3)コロバシ

竹や木でできたウナギを捕獲するための筒状の仕掛け。

- ④ 川漁で矢野さんが使っている木造の舟
- ⑤ コロバシで矢野さんが捕らえたウナギ
- ⑥ 四万十川の特徴であるアユ（塩焼き）。これは道の駅「よって西土佐」で撮影

ウナギ捕りで 目覚めた 川漁の魅力



松下 知史さん(27歳)
株式会社 無手無冠・営業
(四万十町十川地域)

佐 竹さんから「若者でいちばんの川好き」と紹介されたのが松下さん。川岸でウナギの仕掛けをつくり

投じるところを見せられました。川で魚を捕るのが大好きで、「このあと親父と一緒に舟で上流まで仕掛けに行くんです」と楽しそうです。

僕

にとって川は、昔からいろいろな魚を掛ける漁場でした。もちろん泳ぎもしましたよ。夏休みは学校のプールで泳ぐ同級生が多かったなかで、僕たちのグループは川で泳いでいました。実家のすぐ下が川なので、目の前にこれだけきれいな川があれば自然と入りたくありません。川の渡り方も、消防士だった父に教わりました。

今は四万十町の大正地区にある酒蔵で営業の仕事をしていますが、仕事の行き帰りも常に川を渡ります。川を渡るときは、消防士が教わったように、足元を確かめて歩きます。川を渡る時は、消防士が教わったように、足元を確かめて歩きます。

を見ながら、どこに何を仕掛けようかわくわくしながら考えています。

川にハマったきっかけはウナギです。ウナギは夕方仕掛けて翌朝上げに行くのですが、中学校2年生のときに後輩と仕

いたので張り合いがあります。はえ縄の仕掛けは誰かに教わったわけではなく、中学生の頃から試行錯誤して改良を重ねた完全な自己流です。これだけ楽しい川でも、大雨が降った後は濁流にのまれそうになったこともあります。僕の子どもは1歳ですが、川の楽しさを教えた1半年、危険と隣り合わせなことはさせたくないのも本音ですね。



ウナギを捕えるため、川に仕掛けを投入する松下さん

川ガキに学ぶ 賢い川の遊び方

取材中に、車のなかから「かわがせんせい」と書かれた看板を見かけました。印象的なフレーズだったため調べたところ、子どもたちが川で安全に遊べるようにとつくられた、川遊び初心者向けの『川ガキ教科書』のキャッチコピーにもなっていました。

川遊びの楽しさや危険も含め、上級生から教わり遊べるなかで自然と身につけていった、というかつての川ガキたちのエピソードを表すようなコピーです。

今回4人に話を聞きながら、川には川ならではの魅力があることがよくわかりまし

た。「危ないから川に近寄るな」ではなく、川のことを知り、何が危険か把握したうえで楽しく遊ぶ。それが四万十の魅力ある川ガキ文化を育ててきた理由であり、そのことの大切さを改めて教えてもらいました。



【生活文化】

(注5) 火振り漁

川面で松明を振りながら網に鮎を追込む伝統漁法。

(注4) はえ縄

1本の幹縄に多数の枝縄をつけ、枝縄の先端に釣り鉤をつけた仕掛け。



見えてきたのは

泳ぐの多彩さ

着目したのは 近代泳法「以前」のこと

「あなたは泳げるの？」と聞かれたら、皆さんはどう答えるだろう？

「平泳ぎならかなり泳げるけど、クロールはヘタかな」

「実はカナヅチで……」

「スイミングスクールに通っていたから」

「海辺で育ったからふつうに泳げる」

「スキューバダイビングのライセンスをもってるんだ」

試しに周囲の人たちに聞いてみると、いろいろな答えが返ってきた。その人の出身地や生い立ちなど意外な一面を知ると同時に、「泳ぐ」といっても、ある人にとつての舞台はプールであり、また別の人にとつては川や海や海底の場合もあり、思いのほか多様なことに気づく。泳ぐに関する話で盛り上がるのは小中学生時代のプール授業の思い出だ。

「消毒のために浸かった水槽ってまだあるのかな？」

「あの目を洗うやつ、苦手だった。どうしても目を瞑ってしまっから」

昭和生まれにはなじみ深い「腰洗い槽」と「洗眼器」はもう使われていないそうだ。気温が低い目に震えながら浴びたシャワーも、今は温水式が主流になりつつある。学校プールの設備だけでも数十年経つと変化がある。さらに、学校プールと水泳授業が曲がり角を迎えているらしい。

今こそ「泳ぐ」について考えよう——とスタートした本特集だが、抜けている部分があることにお気づきだろうか。そう、クロールをはじめとする近代泳法を取り上げていない。『日本民俗大事典』の「水泳」の項では「水の中をおよぐこと。水およぎともいう。」とある。意外と曖昧で幅が広い。ならば近代泳法は他に任せて、そこに至る道筋や少なくなつた川ガキなどに目を向けようと考えたのだ。

地理的条件から見た 「泳ぐ」の系譜

そもそもヒトの体は魚類のような泳ぐことに適した構造ではない。図1は高木英樹さんの著書『人はどこまで速く泳げるのか』に掲載されているイラストを編集部が描き直した。これは公益財団法人海洋生物環境研究所がWebサイトで公開している図に、高木さんが「ヒト」を書き添えて作成したもの。ヒトが泳ぐ速度は、海でブルブルとかわいらしく泳いでいるトラフグにも劣ることがわかる。

しかも、日本人の体型は長身瘦躯が多い欧米人に比べてハンデイを負っている。にもかかわらず、日本の競泳選手は世界と伍して戦ってきた。日本人特有の探究心や創意工夫などが「水泳ニッポン」の伝統をつくつたといえる。近代泳法4種のうち、特に平泳ぎがお家芸と言われるほど伝統的に強いのは、和式トイレで育つた日本人の足首が柔軟だからという説もある。

そしてもう一つの要因は、地理的条件とそこから育まれた数々の泳法の存在が挙げられるだろう。

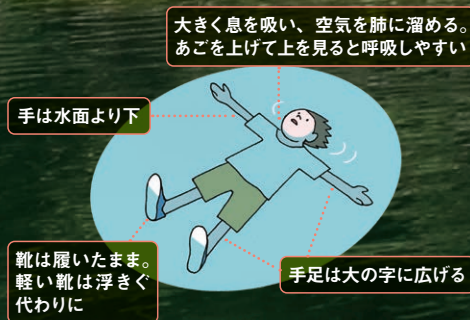
海に囲まれた島国であり、海岸線は砂浜と岩場が連続し、入り江や小さな島も点在する複雑な構造をしている。また、ヨーロッパ大陸に比べると川の勾配はとても急で、明治時代に川や港湾の工事のために来目したオランダ人技師、ヨハネス・デ・レーケが日本の川を見て「これは川ではない、滝だ」と驚いたと伝わるように、さまざまな水域が存在し、それに適応する形で泳法が生み出されていく。13の流派が伝わる日本泳法のうち、今回は水府流^{すいふりゅう}水術を取材させていただいた。紙幅の関係で取材記事では言及できなかったが、かつて水府流^{すいふりゅう}水術には、流れの速い上流の稽古場で発達したとされる「上町泳ぎ^{うまちようぎ}」、江戸の水戸藩邸の池で指南されたのが始まりとされる「下町泳ぎ^{しもまちようぎ}」の二系統が存在し、泳ぎも少し異なっていたという。

海でも川でも湖沼でも、祖先は魚介類を生きる糧として採取してきた。戦国時代には武術の一つとなり、江戸時代には各藩が水術を編み出す。明治時代には青少年の健康と体力の増強を狙う富国強兵策とも結びつき水練場の整備が進み、海水浴も奨励された。1920年（大正9）に開催された夏季オリンピック（第7回アントワープ大会）で惨敗したことから西洋の近代泳法を取り入れる……。駆け足で

山口県の佐波川（さばがわ）で泳ぐ坂本貴啓さん（連載「Go! Go! 109 水系」執筆者）。川を知り尽くしている坂本さんだからこそ、泳ぐときはライフジャケットを着て、周囲を注意深く観察する

図2「浮いて待て」海に転落した場合の対処法

出典:海上保安庁ニュースリリースを参考に編集部作成



「泳ぎの原点」に 今こそ立ち返ろう

まとめると、こうした場合の流れになるが、根底には水と水辺で営みをつづけた人びとがいる。

翻って現代を見ると、「泳ぎが上手＝プールで泳いだときにクロールが速い」というイメージが強い。しかし、四万十川で沈下橋から飛び込んでいたかつての川ガキたち、そして房総半島南部で漁をして海と暮らしてきた人たちに話を聞いたあとは、「泳

ぐ」の定義は今よりもっと広がったのではないかと思うようになった。冒頭に記したように「泳げる?」と聞くと、「平泳ぎなら泳げる」「泳げない」などさまざまな答えが返ってくる。しかし、海で漁師として生計を立てていた鱸井さんの答えは違った。

鱸井さんは熟考したのち、「クロールとか平泳ぎとか『ちゃんと』泳げるかと言われると泳げないけれど、溺れない程度には」と言った。そして赤沼竜義さんが「速さよりも海の漁師は深く潜れるかどうか重要」と指摘したように、泳ぐ行為が何のためにあったのかを振り返ると、「自分の身を守る術」というシンプルな原点に思い至る。

実際、小中学校で「水泳運動」として行なわれていた「クロール」と「平泳ぎ」に加え、学習指導要領の改訂によって新たに「安全確保につながる運動」が追加された。背浮きや浮き沈みをしながら続けて長く浮くことができるように

「泳ぐ」を遡ると 多様な古層が見えてくる

四万十川では、幸運なことに絶滅危惧種とされる川ガキに会うことができた。夕暮れにお母さんが見守るなか、姉弟はいつまでも泳いでいた。それはどんな心象風景となるのだろう。

もちろん近代泳法を扱わなかったのは否定的な意味ではない。都市部に住む多くの人間にとって、それは水に直接ふれる貴重な機会を与えてくれるのだ。まもなく4年に一度のスポーツの祭典が開かれる。「水泳ニッポン」の精鋭たちが世界とどう戦うのか目を凝らし、思いきり応援しよう。さらに、もしも最近泳いでいないのであれば、自らの体を水に浸して手足を自由に動かしてみたい。プールでも海でも川でも湖でも、自分が好きな水の場所です。

図1 魚とヒトの泳速度比較

出典:(公財)海洋生物環境研究所「海の豆知識 Vol.5」魚の遊泳能力と温度、高木英樹著『人はどこまで速く泳げるのか』を参考に編集部作成

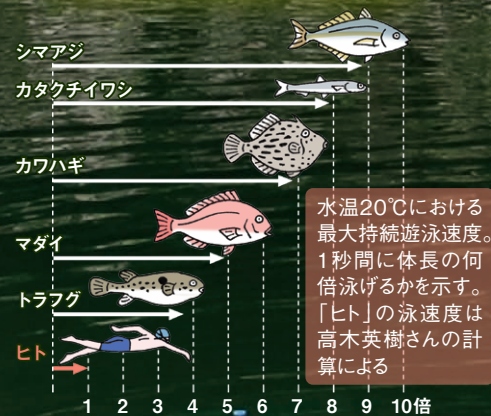
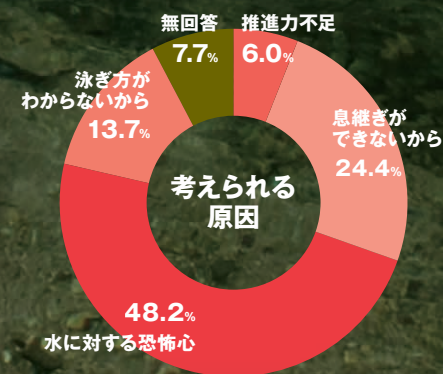


図3 子どもが溺れる原因として考えられること

出典:佐藤友音・池田拓人(2019)「小学校体育における水泳授業の実態に関する研究―目標・内容・方法に着目した課題の抽出―」和歌山大学教育学部紀要 教育科学 第70集(2020), pp.109-116。(グラフは編集部作成)



するもので、小学校は2020年(令和2)から、中学校では2021年(令和3)から適用されている。

服を着たまま水のなかに落ちてしまつた場合「背浮き」は有効といわれている(図2)。肺に空気を溜めて、口と鼻以外の体の部位を沈ませる。おへそを浮かせて体をまっすぐに保つ。それで浮く感覚はつかめるそうだ。子どもが溺れる原因として挙げられる「水に対する恐怖心」と「息継ぎができない」に対しては背浮きは有効とされる(図3)。まさに原点回帰が図られているのだ。

近代泳法以前の「泳ぐ」に目を向け、薄皮を一枚一枚剥がすように見ていくと、古層には多様な文化があった。それは「泳ぐ」に限ったことではない。前号の「そば」もそうだったように、今は当然とされる事柄もルーツをたどると知らないこと、思いがけないことに行きつく。水と人の暮らしは、なんと奥深いものなのか。

巻頭言をお願いした村山嘉昭さんの著書『川ガキ』には福島県・檜枝岐川の少年4人組が紹介されている。彼らはまだ雪が残る4月1日に川に飛び込んでいたという。檜枝岐村に知人がいるので聞いてみると、彼らは高校進学でいったん村を離れたが、3人は村に戻ってきて働いているそうだ。四万十川の現役の川漁師、矢野健一さんも関東で働いていたものの、川のそばで暮らしたくて帰郷した。

身近に川や海などがあり、そこに体を浸して遊ぶ。そんな時間を過ごした思い出は、故郷から離れたい愛着も育むよううだ。

【文化をつくる】

良の風土記 23

じゅんさい鍋 (秋田県山本郡三種町)

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回はきれいな水でしか生きられない水生植物の若芽を食す秋田の「じゅんさい鍋」です。

「水中のエメラルド」を食す じゅんさい鍋

「沼縄」とうたわれた高級食材

ぐつぐつと煮立った鍋のなかへ、いちばん最後に入れる具材が「じゅんさい」だ。すぐに色が鮮やかな緑に変わるので煮過ぎないように取り皿へ移す。じゅんさいを箸でつまもうとしても「プルン」と逃げていくのは、ゼリー状のぬめり（寒天質）をまとっているからだ。なんとか口に運ぶとプチプチとした食感、そしてつるりと喉を通るさわやかな風味を感じる――。

ここは秋田県北西部にある三種町。日本有数のじゅんさいの生産地だ。じゅんさいはスイレン科の多年草で、古くは「沼縄」とうたわれ、高級食材として懷石料理などに用いられてきた。

じゅんさいを栽培する沼の水面には葉がびっしり浮かぶが、人びとが食べるのは葉になる前の若芽。沼底から水面に伸びる茎から枝分かれした若芽を、舟に乗った摘み手が一つずつ収穫して出荷する。

来客を鍋でもてなす秋田の食文化

かつてじゅんさいは各地に分布していたが、今は三種町のほか青森、山形、福島、北海道など限られた地域で栽培されるのみ。なぜなのか？

「じゅんさいはね、きれいな水じゃないと育たないんだよ」

そう話すのは長年じゅんさいを育てている石川勇吉さん。石川さんのじゅんさい沼には白神山地を水源とする素波里ダム（注）の水が引かれている。

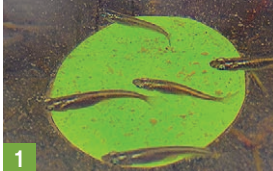
「じゅんさいは繊細な水草なので農薬は使いません。除草剤を使ったら枯れてしまうし、生活排水が流れ込んでもダメになります」

唯一用いるのは、じゅんさいの若芽を食べてしまうユスリカの幼虫に対する薬剤のみ。これは魚毒性がきわめて低いため、じゅんさい沼ではメダカが群れをなし、トンボが飛び交い、カエルやドジョウやタニシがいて賑やかだ。

若芽をいただく秋田の「じゅんさい鍋」

【取材協力】
石川さんの沼
秋田県山本郡三種町
鹿渡字西小瀬川351

123 石川さんの
じゅんさい沼にいたメ
ダカ、イトトンボ、タニ
シ。夏が近づくほど生
きものは増えていく



じゅんさいの収穫は若芽が出る5月から8月のお盆ごろまで。地元の人たちは酢の物にしたり、わさび醤油や酢味噌で和えたりもするが、鍋で食べることが多い。

「暑い時期になんで鍋？とよく言われますが、もともと秋田は鍋が多い。『きりたんぽ鍋』は有名ですが、貝焼きが訛った『かき鍋』、ごはんをすりつぶした団子の『だまこ鍋』もある。お客さんが来たら鍋でもてなす食文化があるんです」

じゅんさい鍋は家でつくれるだまこを用いることが多い。しょうゆベースの出汁に、鶏肉、マイタケ、長ネギ、ゴボウ、しらたきなどを入れた後にじゅんさいを投入する。

「じゅんさいは主役なのに、なぜか最後に登場するんだよね」と石川さんはいたずらっぽく笑った。

**子どもが夢中になる
生きもの賑わう沼**

三種町（当時は山本町）がじゅんさいの栽培に乗り出したのは昭和50年代。国の減反政策による米の転作物として、この地に自生していたじゅんさいに目を向けた。

「生産量のピークは1991年の1260トン。生産者もつとも多かったのはその翌年で578戸

を数えました」と三種町商工観光交流課係長の近藤健さんは語る。

現在、国内で流通するじゅんさいの約8割が中国産といわれるなか、2011年（平成23）に三種町森岳じゅんさいの里活性化協議会（以下、協議会）を設立し、三種町の国産じゅんさいと食文化の伝承、消費の拡大に力を注ぐ。

日本の農業を取り巻く高齢化問題はじゅんさいも例外ではない。2023年（令和5）の生産量は210トン、生産者は127戸。次代を担う若手の登場が待たれる。

協議会では毎年6月に「世界じゅんさい摘み採り選手権大会」を開催している。1時間でどれほど多くのじゅんさいを摘み採れるかを競うもので今年で11回目。また、観光農園として「摘みとり体験」も毎年受け入れている。

「生きものがいっぱいいるので子どもたちは大喜びです。そうして若い人たちが興味をもってくれるといいですね」と石川さんは言う。

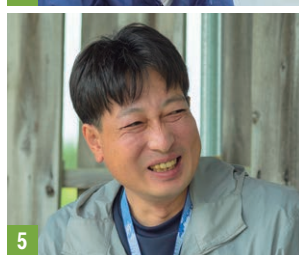
機械も農薬も化学肥料も使わず、雑草取りも収穫もすべて手で行なう栽培法はまさに農業の理想形。ポリフェノールが豊富で成分の90%以上が水分だ。「水中のエメラルド」とも称されるじゅんさいに、もっと光が当たることを願う。

（2024年5月27〜28日取材）

じゅんさい鍋（5人分）



- 1 だまこ 20〜25個
長ネギ 3本
ゴボウ 適量（さがぎ）
セリ 1把（水菜でも可）
マイタケ 1パック
油揚げ 2枚
鶏肉 250〜300g
しらたき 適量
じゅんさい 200g
しょうゆベースの出汁 適量
- 2 鶏肉はぶつ切りに、マイタケは割いておく
- 3 米をすりつぶしてこねるだまこ。秋田ではふつうに家庭でつくって食べる
- 4 出汁が温まったら、ゴボウ、マイタケ、鶏肉、しらたきなどの順に入れ、一呼吸置いて鶏肉が煮えるのを待つ。火が通ったらセリを入れる。最後にじゅんさいを投入し、緑色になったら火を止める。じゅんさいを温めすぎると食感を損なうので注意



4「じゅんさいを育てるのは楽しい」と話す石川勇吉さん（株式会社秋田芝生 取締役会長） 5じゅんさいの普及に努める三種町商工観光交流課係長の近藤健さん 6購入したときは一つの大きな沼だったという石川さんのじゅんさい沼。5月から8月初旬まで毎日、舟に乗った摘み手がじゅんさいを収穫 7じゅんさいの若芽。茎から枝分かれた若芽を食す 8摘み手の女性たちが早朝から作業して収穫したじゅんさい 9ホテル森山館で提供するじゅんさい料理。左は酢味噌、右は青じそドレッシングで食す 10撮影にご協力いただいたホテル森山館。じゅんさい鍋は事前予約が必要



【撮影協力】ホテル森山館
秋田県山本郡三種町森岳字木戸沢 115-72
Tel.0185-83-3300 <http://www.moriyamakan.com/>

「水中のエメラルド」を食す じゅんさい鍋

（注）素波里ダム

1970年竣工の秋田県営の多目的ダム。三種町のほか、八峰町、藤里町、能代市の田畑に水を供給する。

いた水場の「価値」

存続の論理

名水百選「浜の川湧水」から
考える生活と観光



生活

朝早くに洗濯物を抱えて浜の川湧水へやってきた満尾はるこさんとゼミ生たち

地

域が抱える水とコミュニティにかかわる課題を、若者たちがフィールドワークを重ねて議論し、解決策を提案する研究活動「みず・ひと・まちの未来モデル」。4

年目を迎えた2024年度は、名水百選の選定地である長崎県島原市の「島原湧水群」を対象地域に選びました。

この研究活動のかじ取り役は、法政大学現代福祉学部准教授の野田岳仁さんです。野田さんの指導のもと、新3年生のゼミ生11名とミツカン社員2名が研究に取り組みます。2024年5月2～5日、野田さんとゼミ生たちは島原市を訪ね、島原湧水群の「浜の川湧水」を中心に調査を重ねました。

観光地化が進む「浜の川湧水」において、その水を使って暮らしている地元の人たちは来訪者をどう考えているのでしょうか。野田さんに記していただきました。

〈水場の存続〉と 〈水場の「価値」存続〉

みず・ひと・まちの未来モデル4年目は、長崎県島原市の島原湧水群を対象とする。

今回の調査は収穫が大きい。例年の夏の調査合宿に匹敵するほどのデータを得ることができ、夜のディスカッションは白熱した。最終日前夜のディスカッションでは、それまでも問うべきクエスチョンが浮かびあがり、現場の人びとの論理をたどりながらその解を導き出す心躍る時間であった。初回の連載(68号)にてフィールドワ

ークでは仮説が裏切られ、現場でもっと深い問いを立てる重要性を述べたが、今回の経験もそれにあたる。そんな経験の共有を願って、調査のプロセスを記述していきたい。

まずは、島原湧水群をとりあげる理由を名水百選選定地が抱える課題とともにあげておこう。1985年(昭和60)からはじまった環境省による名水百選選定制度の狙いは、「名水」のお墨付きを与えることによる環境保全と地域活性化の促進にあった。地域資源の再評価によって新たな管理の担い手の参画や集客による経済的効果が期待されているからである。

けれども、選定から40年が経過

暮らしに根づ

観光

野田岳仁

法政大学
現代福祉学部 准教授

NODA Takehito

1981年岐阜県関市生まれ。2015年3月早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士(人間科学)。2019年4月より現職。専門は社会学(環境社会学・地域社会学・観光社会学)。2023年8月、著書『井戸端からはじまる地域再生——暮らしから考える防災と観光』(筑波書房)を上梓した。



浜の川湧水で遊ぶ子ども。かんざらしを提供する「銀水」が営業している時間帯は観光客が多い

したいま、存続が危惧される名水百選選定地もでてきた。その理由は、①水場の観光地化に伴って、地元住民の〈生活〉と〈観光〉の折り合いがつけられないいうえに、②地元住民の利用者・管理者の減少や高齢化によって、誰も利用しない魅力のない観光スポットに変貌してしまったからだ。地元住民からは「昔とは変わってしまった」とか、「なんのために守るのか」といった存続の是非を問う声が発せられるようになっていく。

しかし問題なのは、観光地化や担い手不足という表面的な現象ではない。人びとは地元住民の暮らしに根付いた水場の「価値」を知る利用者や管理者がいなくなることとを嘆いたり、地元の生活利用の「価値」から離れた水場が保全されることに對して、なんともやるせない気持ちを抱いているからである(注1)。すなわち、名水百選選定制度はたしかに〈水場の存続〉を指したものであるのだが、地元住民の暮らしに根付いた〈水場の「価値」存続〉に至っていないことが本質的な問題と考えられるのである。大切なことは、地元住民に共有された水場の「価値」を存続できなければ、観光客を惹きつける観光資源にもなりえない



朝6時から夕方6時まで3時間
ずつつ交替しながら浜の川湧水で
聞きとりを続ける学生たち

浜の川湧水における 《生活》と《観光》の拮抗

島原湧水群の代表格である「浜の川湧水」では、浜の川町内会の共有地にある共同洗い場でありながら、驚くことに島原市の政策上は、隣接する島原名物「かんざらし」の名店「銀水」(創業大正4年・2016年復活)とともに「観光施設」と

ことであろう。地元の人言葉の借りれば、「形(ハード)だけ残ってなんにもならない」ということである。

この問題に対して島原湧水群の事例はそのヒントを示してくれる予感があった。もっとも、この本質的な問題にストレートに回答できるか確信があったわけではなくが、少なくともその手がかりとなりそうな問いには応答できると考えていた。

しての扱いとなっている。すなわち、地元住民の《生活》と《観光》とが拮抗する典型例なのである。すぐ後にデータを示す通り、

「浜の川湧水」は2018年8月の調査時点では1日に88人の利用者であったのが、約4倍の343人に増加し、市内有数の観光スポットになっている(注2)。観光地化に伴って、地元住民は観光客が訪れる時間帯を避けて水場を利用するようにしているし、観光客による私有地への無断駐車に迷惑している人もいる。最近では、水を飲むための柄杓が真つ二つに折られ、私たちが訪れた1週間前には新しい柄杓3本が盗まれたというのだ。

にもかかわらず、浜の川町内会の対応はじつに前向きで、まるで観光地化を歓迎しているかのようにもみえる。もっとも、調査を進めていくと人びとの態度には差異があつて、歓迎とまではいかない意見を示す人がいないわけではなかった。それでも、町内会としては前向きに受け入れているのである。これまで名水百選の現場を数多く歩いてきたが、これほど観光地化に前向きなフィールドに出会ったことはなかった。一見不可解にもみえる人びとの態度の背後にあ

る地域社会の受け入れの論理をいくつか解き明かしたいと考えていたところに、この連載を読んでくださったっている町内会長の相良信一さんから「ぜひうちでも」と声を掛けていただくことになった。さらに、今年の8月には名水百選選定の176の市町村が一堂に会する「名水サミット」が島原市で開催され、水への関心が高まる絶好の機会でもある。

浜の川湧水の観光地化を受け入れる論理

では、なぜ人びとは観光地化を受け入れるのだろうか。私たちはその理由を分析するために、まずは浜の川湧水の利用実態を把握することを目指した。朝6時から夕方6時までの12時間水場に張り付いて調査を行うと、表1のようにじつに多様な利用がみられた。

表1をみてわかることは、明らかに観光地化が進んでいることである。1日の利用者数343人という数字は、2021年度実施の松本編(69号)の「源智の井戸」の209人を超える驚くべき数字である。地域の洗い場の利用者数としては全国最多といえるのではないだろうか。2018年の数字と比

べても、行政政策上の「観光施設」という位置づけを体現するかのようには、観光客の利用が急増しているのである。この表を丁寧に見ると、浜の川町内会や近隣住民の利用は早朝の時間帯に集中していることがわかる。10時のかんざらし店舗「銀水」のオープンとともに、水場は観光客利用に一変する。そして、「銀水」利用者が落ち着きだす夕方になると、再び地元住民の利用に戻る。これを見ると、《生活》と《観光》の棲み分けがなされているようにもみえる。これは、住民の生活戦略としての工夫

浜の川湧水をさまざまに利用する地元の
方々。聞きとり調査にご協力いただいた



(注1) ここでいう水場の「価値」とは、水を汲んだり、洗濯できたりという「資源的価値」だけを指しているのではない。この連載で各地のフィールドから明らかにしてきたように、人びとの関係性やむら(村落)の自治と不可分という、いわば「社会的価値」も含まれるであろう。



■表1 浜の川湧水の利用実態(利用件数/人数)

利用者の属性	町内会						島原市内						長崎県内						長崎県外						不明						利用件数	人数
利用区分	①	②	③	④	⑤	見	①	②	③	④	⑤	見	①	②	③	④	⑤	見	①	②	③	④	⑤	見	①	②	③	④	⑤	見		
6:00~ 7:00	2			1	1				1		3														2						10	10
7:00~ 8:00	1			2	2						1			1																	7	7
8:00~ 9:00							3			2												1									6	5
9:00~10:00	1			4							4			3									2								14	14
10:00~11:00				3	2							1		5	4								4								19	14
11:00~12:00				3							1	2		9	5	5	5	5					13								48	31
12:00~13:00				1									8		3	3							22								37	30
13:00~14:00				1	1		2					3		19									11								37	38
14:00~15:00				1									24	11		5		2	45												88	78
15:00~16:00									1				2	19	4	4	4	4					32						4		74	62
16:00~17:00				1	2							10		8									22						2		45	45
17:00~18:00				3						1								3					4						1		12	9
計	4			20	8		5		1	4	9	13	3			2	92	31	12	17	9	3	155	2						7	397	343

(注) 1人につき複数利用がある場合は利用件数として該当区分に反映
見=見学利用には手をつける行為を含めた。水遊びは該当区分に反映

2024年5月3日(金・祝)の野田研究室による聞きとり調査をもとに作成

■表3 浜の川湧水の掃除への参加者数

班	2018年 (平成30)	2023~2024年(令和5~6)					
		4~5	5~7	7~8	9~10	10~12	10~1月
1	12	7	7	6	7	6	5
2	4	4	3	4	4	2	3
3	4	6	6	6	6	6	5
4	11	10	10	10	8	9	8
5	5	4	3	5	4	3	3
6	5	9	8	9	8	8	6
7	3	6	5	6	5	4	5

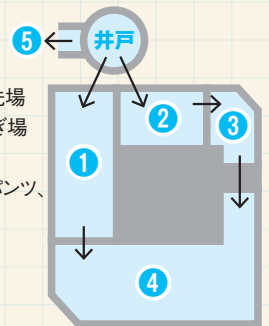
■表2 浜の川町内会の戸数

班	2018年 (平成30)	2024年 (令和6)
1	6	6
2	7	3
3	6	6
4	8	8
5	6	5
6	10	9
7	6	5

野田研究室による聞きとり調査をもとに作成

■浜の川湧水の
利用区分と規則

- ① 飲用、魚、食品、洗場
- ② 食器、食品、すすぎ場
- ③ 食器、食品洗場
- ④ 洗濯場(おしめ、パンツ、靴は洗濯不可)
- ⑤ 飲用



なのだと捉えるゼミ生もいた。そうまでして観光地化を受け入れる理由とはどのようなものなのだろうか。

調査を進めていくと、浜の川湧水の持続的利用に対して、町内会が抱える不安要素が2つあることがみえてきた。そして、この不安要素を解消する手段として、水場の観光地化が位置づけられているようなのである。どういうことであらうか。

ひとつは、水質の安全性についてである。住民はもちろん、水汲みに訪れる観光客が増加するなかで、水質の安全性の確保は懸念材料であった。これまでは島原市によって年に1回の水質検査が行われていたが、浜の川湧水が引き込まれた「銀水」が復活すれば、食品衛生法の規制のもと、毎月の水質検査が行われることになる。これは利用者の安全と安心につながるものなのであった。

もうひとつは、掃除の担い手不足であった。町内会では、毎週日曜日に浜の川湧水の掃除を行う。班ごとの輪番制である。藻が生えないように念入りにタイルを磨く必要がある、しっかりやろうとすれば、10人ほど必要なものなのだという(表2と表3)。



浜の川湧水の隣に建つ「銀水」の外観(右)。「銀水」を経営する稲田智久さん(中)と提供する「かんざらし」(左)



(注2) 2018年8月28日の6時~18時までに当時の所属先である立命館大学のゼミ生とともに、浜の川湧水で利用実態の調査を行っている。



夕方から行なう討議。
それぞれが調べたこと
やわかったことを報告
し、議論を重ねる



島原市 市民部環境課 班長の濱口広志さん
(左)と主任の原野聖さん(右)。GW中にもかか
わらず連日出動してゼミ生たちをサポート



浜の川町内会の会長を務める相良信一
さんが初めて島原を訪れたゼミ生たちを
案内。浜の川湧水の資料提供、人物紹
介など全面的にバックアップ

利用頻度と排除性の 逆転現象

いた。しかし、いくつか引つ掛かる点があった。その引つかかりは最終日前夜のディスカッションで焦点化されることになり、それまでの問いを撤回することになった。というのは、浜の川湧水の観光地化に対する意見の差異が、利用頻度と反比例しているからであった。

表3をみてみよう。班ごとにはらつきがあるのだが、注目したいのは2018年時点で参加人数が少なかった3班、6班、7班の人数が増えている点である。「きれいにしておかないとみっともない」という気持ちから掃除にでてくる人が増えたそうだ。観光地化に伴い「みんなでがんばろうという気持ち」になって、所有意識の強化につながっているようなのだ。人びとが観光地化を前向きに受け入れる理由には、町内会が抱える懸念事項を解消する効果がみえつつあった。

説明しよう。これまでの地域資源管理論の定説は、ある資源の利用頻度の高い人ほど排除性を強め

るといふものである。ある資源をよく利用すればするほど愛着やなわばり意識が強くなり、結果的に他者を排除しがちになる。考えてみれば、当然のことであろう。利用価値を深く知っていればいるほどその資源を守ろうとする意識が強まるからである。しかしながら、浜の川湧水では、この定説とは真逆の現象が起きているようなのである。

水神様に手を合わせたり、水を汲んだり、魚をさばいたり、洗濯をしたり、1日に何度も浜の川湧水を利用する人ほど観光地化や観光客の利用を歓迎する傾向にある

ようなのだ。一方で、利用頻度が低い人ほど観光地化や観光客の利用を歓迎とまではいえない意見のようなのである。すなわち、浜の川湧水の利用頻度が高く、利用価値を認識している人ほど排除性は低く、利用頻度の低い人ほど排除性を高めてしまうということなのである。これは一体どういうことなのだろうか。

私たちが強く惹きつけられたのは、この通説の逆転現象の背後にある人びとの判断の奥深さにある。一見不可解にもみえる人びとの判断の合理性を問うことで地域資源管理論の新たな知見を導きだして

くれるように感じられたからである。

たしかに浜の川湧水の管理体制は弱体化傾向にある。したがって、浜の川湧水の行く末に疑問を抱く意見がないわけではなかった。なかには市に管理を任せることにならるのではないかと語る人もいる。それでも、利用頻度の高い人ほど楽観的で、利用頻度の低い人ほど悲観的であるようなのだ。私たちは聞きとりと利用者の行為の分析を重ねるうちに、ある一貫した考えに気付かされることになる。

その考えとは次のようなものである。すなわち、利用頻度の高い人は、心の底から浜の川湧水の利用価値を感じている。こんなにもいいものなんだから、独占することは許されない。観光客にもほとんどん利用してもらいたい、その価値を感じてもらいたいと思っている。そして、この価値を共有することができれば、その価値を感じた担い手が現れ、自ずと浜の川湧水は存続するだろう。そう確信しているように考えられたのである。このような人びとの考えをここでは、「水場の「価値」存続」の論理と呼んでおこう。では、このような人びとの考えをどう理解すればよいのだろうか。

(注3)

水場の担い手獲得へ向けたファンマーケティングとは、闇雲に担い手を探すのではなく、水場を観光利用として外部に開くなかで、利用者のなかから「価値」のわかるファンを見だし、担い手になってもらうようなアプローチであろう。





春の合宿に参加したゼミ生とミツカン社員。浜の川湧水で撮影

〈水場の「価値」存続〉の論理の意味

ビジネスやマーケティングの世界では、全体の数値の大部分は全体を構成する一部の要素が生みだしているとする「パレートの法則」が知られている。経済学者であり、社会学者でもあったヴィルフレド・パレートが発見した統計モデルであり、売上の8割は2割の顧客によって生み出されているとするものだ。じつさいには、法

則というよりも経験則として経済現象や社会現象を説明するモデルとして活用されている。

近年、企業は不特定多数の顧客に向けたマスマーケティングよりもファンマーケティングに力を入れるように方向性が変わりつつある。ファンマーケティングの現場では、このモデルに基づき不特定多数の顧客の拡大よりも少数の熱狂的ファンを生みだすことがビジネスの持続性を高めると考えられているからだ。広く浅く顧客にアプローチするのではなく、狭く深く価値共有できるファンの開拓がポイントである。

〈水場の「価値」存続〉の論理とは、このモデルと親和性が高いように感じられる。つまり、洗い場の存続には、闇雲に担い手を拡大するよりも少数であっても強力なファンの存在が持続性を高めるというものだ(注3)。

学生たちが気づいた「水頭の井戸」の危機(編集部)

島原に到着後、相良信一さんが島原市の湧水群と中心部を案内してくれました。「水頭の井戸」(水頭ポケットパーク)を訪ね、白土湖(しらちこ)方面に向かう途中で少し隊列がばらけます。すると相良さんは列の先頭付近にいた3名の学生たちに工事中の真新しい道路を指さしながら何か話していました。

「水頭の井戸」は一方通行の狭路に面していますが、その道路を片側一車線に広げるための拡幅工事だったのです。相良さんのお話から「水頭の井戸」が移動する、最悪の場合「つぶされる」という状況にあることがわかりました。

拡幅工事の情報を共有した学生たちは、2日目に浜の川湧水に張り込んでの聞きとり調査(4チームが3時間ずつ交替)をしつつ、「水頭の井戸」でも聞きとりを行ないました。その結果、数年前まで水道組合が存在していたこと、今は14～15軒が交替で掃除していること、拡幅工事は3年後に終わることなどがわかりました。

さらに興味深いエピソードを学生が聞きました。「水頭の井戸」の水で暮らしていたこの地域に上水道が引かれた時、「どうして水にお金を払うのか」と市役所に乗り込んで抗議した男性がいたそうです。水道組合で水を利用していたときに支払うのはポンプの電気代だけ。水にお金を払わない代わりに、井戸や水路を掃除する。それが水を使う対価だったのです。

この報告を聞いた野田さんは「おもしろい!井戸の水は貨幣に代替できないものです。その認識が上水道によって捻じ曲げられたことが強い怒りとなったのかもしれない」と応じました。

夏の合宿では、学生たちが着目した「水頭の井戸」についても深く調査研究していく予定です。



相良信一さんの案内で訪問した「水頭の井戸」

この論理を裏付けけるかのように、観光地化を経て、強力な担い手が出現している。それは、「銀水」を経営する稲田智久さんである。稲田さんは、「銀水」の経営を引き継いだ2020年からほぼ毎週の掃除に参加していた。町内会では、「銀水」を復活させる条件に町内会への加入、5班の掃除に参加することをあげていたが、稲田さんは5班以外の掃除の際にも積極的に参加していた。稲田さんは「銀水」があるのは、浜の川湧水のおかげであるとの底から感じているからであろう。すなわち、稲田さんは浜の川湧水の強力なファンなのだ。

冒頭に述べたように、名水百選選定地ではその存続が揺らぎつつあり、管理の担い手の拡大策が進められている。いわば、管理者獲得へ向けたマスマーケティングである。しかし、町内会員の参加を義務づけたり、ボランティアを動員しても、水場の「価値」共有にはつながらず、魅力のない水場への変貌を招いている(注4)。水場を利用しない「価値」のわからない人が動員されているからである。それに対して、この〈水場の「価値」存続〉の論理は、名水百選選定地を抱える行政職員や地元住民を勇気づけるものであろう。人びとはハードとしての〈水場の存続〉よりも、地元住民の暮らしに根付いた〈水場の「価値」存続〉を望んでいるからである。すなわち、少数であっても水場の価値共有できるファンを開拓する方法に有効性がありそうなのだ。そして見逃せないことに、浜の川湧水がこれほどまで多くの観光客を惹きつける理由とは、紛れもなく、暮らしに根付いた水場の「価値」が引き継がれているからなのである。

(2024年5月2～5日調査)

(注4) 野田岳仁(2018)「 commonsの排除性と開放性—秋田県六郷地区と富山県生地地区のアクアツーリズムへの対応から」鳥越皓之・足立重和・金菱清編『生活環境主義のコミュニティ分析—環境社会学のアプローチ』ミネルヴァ書房:25-43





社会の変遷とともに堤防伸びゆく

木曽川

河川を軸に市民団体やまちづくりの調査研究を行なう坂本貴啓さんが全国の一級河川「109水系」を巡り、それぞれの川が流域の人びとと地域社会に及ぼす影響を探ります。今回は坂本さんが社会人として3年半過ごした「木曽川」を巡りました。

手取川へ来る前に
住んでいた大河川

「先生、前回の手取川編読みましたよ。手取川の方に山を越えて来る前、先生は木曽川あたりにいたんですよね。どんなところだったんですか？」と学生に聞かれた。

金沢大学に着任してから半年が経ち、いよいよ新設研究室に学生が配属されてきた。年の差がちやうど私と師匠（筑波大学の白川直樹准教授）と同じで、私もそんな年齢になったことを実感する。

北陸育ちの彼はまだ日本海側の川しか知らない。日本海側と太平

洋側の川の違い、川の勾配の違い、河川スケールの違いなど、さまざまある。大河川の木曽川をぜひ彼に伝えたいが、何が一番驚きの対象だろうか。そんな期待感もちながら、木曽川から中央分水嶺を越えて手取川にやってきた私は、再び分水嶺と記憶を遡り、教え子連れて木曽川を巡ることにした。新社会人の頃に見聞きした素晴らしい木曽川を紹介したい。

木曽川は長良川、掛斐川とともに「木曽三川」と呼ばれ、それぞれ川が長い。この一つだけでも大流域に相当する。そんな木曽川の特徴を聞かれたら、私は「堤」な

堤治り
伸び行く先の桜かな

坂本貴啓



坂本 貴啓

さかもと たかあき

金沢大学 人間社会研究域地域創造学系 講師

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士(工学)。国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター専門研究員、東京大学地域未来社会連携研究機構北陸サテライト特任助教を経て2023年10月より現職。

109水系

1964年(昭和39)に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

川名の由来【木曽川】

長野県木曽郡木祖村、鳥居峠南斜面付近に発し、木曽十一宿と並行して流れて伊勢湾に入る。キノは吉蘇とも書かれ、クマンに対する豪族がいた国とする人もいる。

ここで仕事ができただけでなく、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士(工学)。国立研究開発法人土木研究所自然共生研究センター専門研究員、東京大学地域未来社会連携研究機構北陸サテライト特任助教を経て2023年10月より現職。

博士課程を修了し、自然共生研究センター(以下、共生センター)で研究員として働きはじめたのは2017年(平成29)4月。私は川の名前がついた木曽川駅の付近から自転車通勤していた。家の前の暗渠の用水路を遡り、木曽川の堤防に出てからは気持ちよく自転車を漕いだ。

しには語れないと思う。木曽川水系には幾多の種類の堤防とそのゆかりがある。暮らしの成り立ちともかわり深い。御園堤、輪中堤、背割堤、豊堤など堤防だけでもさまざまな伝統がある。

木曽川の堤防上をチャリ通勤

流域に着目することにした。





1 土木研究所 自然共生研究センターの実験河川。3本の川を用いて比較実験が可能 提供：土木研究所 自然共生研究センター 2 坂本さんの当時の職場である自然共生研究センターの敷地。木曽川駅近くの自宅から自転車で水路を通り、桜並木の堤防上を走り、橋の上から木曽川を定点観測した後、職場に通うのが日課だった 3 自然共生研究センターのそばに広がる国営木曽三川公園かさだ広場。各務原木曽川かわまちづくり会が描いた夢提案の舞台の一つ

河川法が改正され、河川環境の整備と保全が法目的に加わり、法目的達成のために自然共生研究センターはできました。「いい川を未来へ」を旗印に研究に取り組んでいます。このセンターからたくさんの若手研究者が巣立っていったこともセンターが25年の歳月のなかで生み出した成果の一つと考えています。



国立研究開発法人 土木研究所 自然共生研究センター長 森 照貴さん



者としてのキャリアの幅を広げてくれた。先輩の調査を手伝うなかで、さまざまな河川環境研究のアプローチを知ることができたこと、全国各地から河川行政の人たちが相談に訪れ、課題を俯瞰的に把握できたことなど、今の私のような大学の一人研究室主宰の立場では知り得なかったことばかりだ。

また、共生センターは木曽川という地域に根ざした研究所という面ももっている。25年間、全国から4万人以上の人が来ているが、周辺の中高校生、行政関係者、地域住民もよく見学に訪れている。ある日、地域住民が共生センターを訪れ、周辺地域で川を活かしたまちづくりを行ないたいという話があった。そこで共生センターもサポートし、住民主体の「各務原木曽川かわまちづくり会」が発足した。複数回にわたるワークショップを行ない、夢提案を絵にまとめ、国交省の木曽川上流河川事務所長、各務原市長に披露した。これをきっかけに、絵に描いた内容を実現するための社会実験が今も行なわれている。共生センター在籍時に、研究のアウトリーチとして、地元のために還元できたことの一つかもしれない。

暴れ川だからこそ生まれた多様な「堤」

木曽川ではとにかく堤防沿いを走った。車でも自転車でもランニングでも川に沿って通勤し、出かけて、散歩した。何気なく走っていた堤防それぞれに名前と役割がある。堤防の成り立ちに歴史あり。まずは「御開堤」を紹介したい。御開堤は木曽川左岸側、尾張藩（愛知県）側に発達した堤防で、1609年（慶長14）に徳川家康が尾張藩に命じて犬山・弥富の48kmの堤防を築いた。私はこの現役の土木遺産の上を通勤していたことになる。尾張御開堤に対し、対岸の美濃側は親藩の尾張藩側よりも若干低く堤防を設けることが取り決められていたため、部分的に水防を行なうしかなかった。

そこで編み出されたのが「輪中堤」である。集落ごとに堤防で囲い、水害から土地を守る築堤が行なわれた。木曽三川には輪中集落があちこちにつくられた。学生は「川でもないところに堤防があるってなんか変な感じがします……」と周囲に続く堤防を見渡していた。

輪中堤は集落の生命線ともいえる。立派な堤防で囲われているが、それが万一破れた時のことも想定し、家屋を高くする「ごんぼ積



長良川の畳堤

木曽川の支流、長良川の岐阜市付近には、昭和初期にできた日本初の「畳堤」が存在する。スリットに畳をはめ込めるようになっており、水位上昇が収まらない時、畳をはめ込んで少しでもあふれないようにする構造。畳堤は、長良川、揖保川、五ヶ瀬川の3河川にしかない。



時を進み、1753年（宝暦3）、美濃側の水害解消のため堤防を本格的に築堤することとなる。ここでつくられた大規模堤防が「背割堤」。薩摩藩の手伝い普請により木曽川、長良川、揖斐川の流路を

分離させる大工事（宝暦治水）が行なわれ、川の流れを安定させ、近代治水の骨格ができあがった。この薩摩藩の大偉業ともいえる工事の裏にあった多くの犠牲を忘れることはできない。背割堤築堤工事は難航し、多くの薩摩藩士が命を落しながらも続けられ完成した。当時の住民たちからすると自分たちのために遠く離れたよその国の人らが犠牲になったことはいたたまれなかったであろう。薩摩藩士の追悼と偉業を称えつくられた神社が背割堤上にある「治水神社」である。この神社は全国から河川の工事関係者が訪れる。背割堤には木曽川時代の思い出が詰まっている。2021年（令和3）9月、背割堤をいい川・いい川づくりワークショップのオンライン配信企画として、「自転車水リレー」を行なった。私はこの企画の責任者であった。コロナ対策と併用しながら全国大会を誘致する難しい判断がなされていた頃、会場に來られない人のために、ときどき野外から中継を入れて川の臨場感を届ける企画をしたらどうかと考えた。

中流の長良川国際会議場から河口の七里の渡しまでの区間を往復し、上流の水と川の幸を海に届け、

み「水屋」「助命壇」「上げ舟」など、二重三重の備えも行なった。土地のさまざまなところに水防の術を見ることができるのは木曽川特有の景観ともいえる。

尊い犠牲と引き換えに生まれた「背割堤」

坂本さんが共生センターにいらした頃に立ち上げた団体で一緒に木曽川のかまちづくりのことを考えてきました。夢提案を描いて4年目となりました。描いた夢を実現できるように河川管理者と連携していきたいと思います。



各務原木曽川かまちづくり会
会長 岩井晴栄さん(右)、事務局長 岩田紀正さん(左)

分難させる大工事（宝暦治水）が行なわれ、川の流れを安定させ、近代治水の骨格ができあがった。この薩摩藩の大偉業ともいえる工事の裏にあった多くの犠牲を忘れることはできない。背割堤築堤工事は難航し、多くの薩摩藩士が命を落しながらも続けられ完成した。当時の住民たちからすると自分たちのために遠く離れたよその国の人らが犠牲になったことはいたたまれなかったであろう。

明治29年の大水害では、祖母がこの水屋で半月から1カ月ほど暮らしたそうです。家の荷物が流れていかに、外から流れてくるものが入らないように、周囲はマギの木で囲んでいます。



明治時代に建てられた水屋を保存している諏訪博保さん

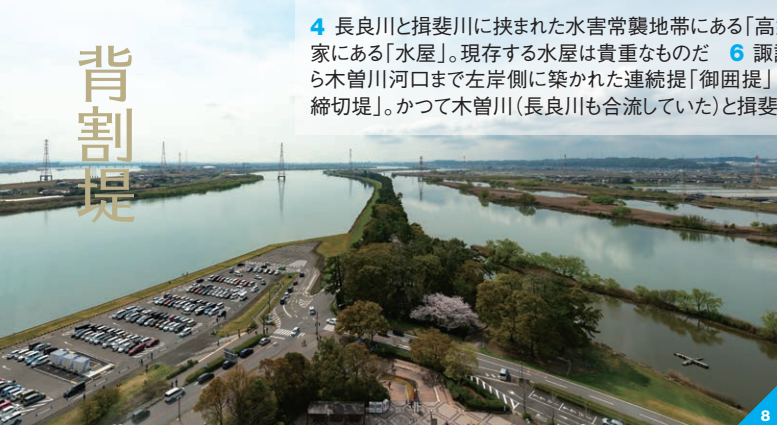


この木曽川の平野部は水害さえなければ豊かに暮らせる土地です。そのためにどんどん水防の術が確立されていったのだと思います。



海津市歴史民俗資料館 学芸員 水谷容子さん

背割堤



4 長良川と揖斐川に挟まれた水害常襲地帯にある「高須輪中堤」（岐阜県海津市） 5 治水神社にほど近い民家にある「水屋」。現存する水屋は貴重なものだ 6 諏訪さんの家には「上げ舟」も保管されている 7 犬山城から木曽川河口まで左岸側に築かれた連続堤「御囲堤」 8 揖斐川（右）と長良川（左）を分流する「油島千本松締切堤」。かつて木曽川（長良川も合流していた）と揖斐川を分離するために先人が苦労を重ねて築いたもの

御囲堤



堤防による環境の分断をなくす

堤防は、川側のことを堤防の外、堤外地（ていがいち）と呼び、家や畑などのある堤防で守るべき側を堤内地（ていないち）と呼ぶ。堤防は洪水防御の手段であると同時に、さまざまな境界にもなり得る存在だ。水害は解消され暮らしは安全になったが、氾濫したところにできた湿地は水はけのよい土地となり、そこに生息していた生きものたちは行き場をなくした。行きついたのが河道内氾濫原（かどうないはんらんげん）だった。生きものたちは木曽川の広大な河川空間のなかにある、本川とつながる流れの緩い「ワンド」やときどき水に浸かる「たまり」などを代替地として生息している。



木曽川のワンド
提供：土木研究所 自然共生研究センター

治水神社のほか、木曽川にはもう一つ川の神社がある。私の住まいからほど近い「堤治神社」だ。木曽川中流域にある土の神様（埴安姫神）を祀った神社である。

木曽川の「急所」を守る神社

堤の様子を実況し、治水神社を参る姿は感動でもあった。私はこの水リレーの翌日に白山・手取川へ旅立ったので、この水リレーこそが木曽川最後の大事な仕事でもあった。



海の幸を持ち帰るもので、自転車で走者役を担った大学生たちが夕日の宝暦治水の賜物、背割

なんて直球な名前の神社を聞いたことがない。治水と密接なかわりがありそうだしと思い、参拝したのがきっかけだった。

実際、延喜式にも「古来木曽川の氾濫は常に住民を脅かしたる事は史書に依りても明白なり。景雲以来、その災害の数を挙げても数え難し、故をもつてその堤防の中心の地に、木曽川全堤防の鎮守として土の神・埴安姫神を奉斎し、堤治神社と称え奉るなり」と登場するという。

古く（706年）から、この場所に鎮座することを考えると、おそらく破堤リスクの高い場所を治める必要があり、そこに神様を祀ることで日常的に気象・水文観測などを行ない、現代の河川事務所的な役割を果たしていたのだろう。

堤治神社で宮司さんに「大亀伝説」という伝説を聞いた。昔、大洪水になった際に神の使いである大きな亀が現れて堤防の決壊を防いで住民や田畑を守ったという伝説だ。この話からはここは堤防が切れやすく、住民の関心事の高かった場所であったことが窺い知れる。この大亀は治水技術の一つで、大岩を置いて堤防に水が直接当たらないようにする「水制工」だったのではないかとと思う。

この神社には地元の工事関係者や造園業者、消防団員などが安全・安心を願って参拝に訪れる。私たちも宮司さんに祝詞をあげて

万が一の破堤に備える水防団

堤防の発達とともに、暮らしの

安寧を祈った過去の話を思い出す。九州の川で氾濫が起きた時、友人の河川管理者に差し入れ物資とともに、ゲン担ぎで堤治神社と治水神社の御朱印と一緒に送った。当時、水害対応に最前線で当たっていた友人は、「木曽川の由緒正しい治水の神社の御朱印と思うとさらに気合いが入るよ！」と水害対応への意欲を新たにしていた。

木曽の川辺や尾張平野など穏やかな木曽川の姿を願う言葉が神社の祝詞のなかでも出てきます。木曽川が決壊しないように木曽川の急所にある神社として願い続けてきたことが窺い知れます。

神社



堤治神社 宮司 大念寺 剛さん



11 神社を人が集まる場にしたいと2022年にスタートした「はにやすひめマルシェ」。毎月第二日曜日に開催している 提供：堤治神社 12 創建から1300年以上経つと伝わる「堤治神社（つつみはりじんじや）」。



水防

木曽川の治水は難しく、揖斐川→長良川→木曽川の順に水位が時間差で上がってきます。雨が降り始めてから洪水になるまでの時間を四刻(8時間)八刻(16時間)十二刻(24時間)(シトキハットキジュウニトキ)と呼んでいました。水害からしっかり守るために、水防団と連携しながら治水を進めています。



国土交通省 中部地方整備局 木曽川上流河川事務所 副所長 高橋伸次さん(右)、総括保全対策官 井川陽二さん(中)、建設専門官 宮本幸典さん(左)

安心が増したのはいうまでもないが、絶対はない。各地で破堤が起こっていることもそれを物語っており、木曽川も同様である。

学生に「木曽川の堤防沿いにちよこちよこある、この小屋なにかわかる?」と質問したら「前、別の川で見た水防倉庫ですかね? 木曽川沿いにはたくさんありますね」と回答した。

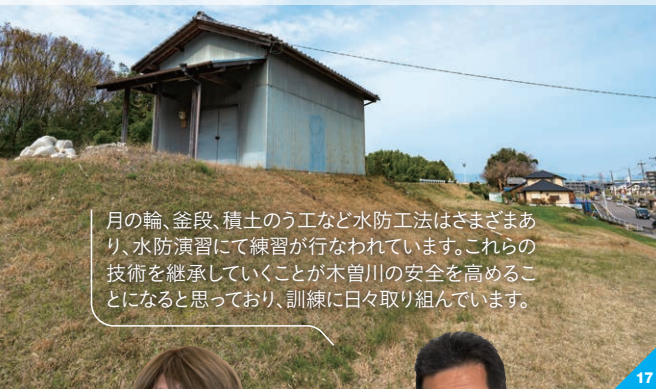
木曽川では治水だけでなく、自分たちの命は自分たちで守る水防が発達した。その一つが「水防団」。木曽川の水防団が全国に多くある水防団と異なるのは「専任水防団」をもっていることである。通常は消防団が水防団を兼務するところが多く、消防団員が消防訓練と併せるときどき水防訓練も行な

うのだが、木曽川・長良川周辺の岐阜の市町村は消防団と水防団を分けている。

専任水防団の一つが、笠松町、岐南町、岐阜市、各務原市で構成し、団を設ける「木曽川右岸地帯水防事務組合」。岐阜市5団、笠松町6団、各務原市3団、岐南町2団の計16団448名(2024年4月8日当時)の団員で構成され規模も大きい。専任なので水防団行事も他に比べて多い。大雨の降る出水期に備えて年5回程度水防訓練が行なわれ、団員が水防技術を高め合っている。

何よりも驚いたのが、近年は団員の高齢化や継続団員の減少により水防技術の継承が課題となっているなか、木曽川では新しく水防

15 水防訓練に取り組む専任水防団の方々 提供:木曽川右岸地帯水防事務組合 16 水害に備えてさまざまな道具がひしめく水防倉庫の内部 17 木曽川の堤防沿いにはこうした水防倉庫が各所にある



月の輪、釜段、積土のう工など水防工法はさまざまあり、水防演習にて練習が行なわれています。これらの技術を継承していくことが木曽川の安全を高めることになっており、訓練に日々取り組んでいます。



木曽川右岸地帯水防事務組合 事務局長 那波哲也さん(右)、事務局長補佐 水野正美さん(左)

団が増えた(長森南)。水害の増加で水防工法への需要は高まっている。水防工法を懸命に磨く風景も木曽川ならではの風景といえよう。

自然と社会を見つめる堤防という視点場

木曽川すべてを回るにはとても時間がかかるので「堤」を視点に見てきた。学生に何が印象に残ったか聞いてみた。一つは「川が南に向かって流れるのが変な感じがする」。これは日本海側出身者らしい感覚だろう。もう一つは「堤防の成り立ちが複雑で奥深い」。

堤防は時代とともに発達し、暮らしも変化してきた。堤防の上に立ち、堤防の内外の風景を眺めることは社会と自然の関係性をひも解く重要な視点場である。

新社会人だった自身が学んだ木曽川の複雑さ、おもしろさを学生にどこまで伝えられただろうか。

金沢に帰る車中、学生がぼそりと言った。「先生、まだなんとなくですが、僕、堤防をテーマにした研究やってみたいです」。堤防からどんな社会と川の関係を見て行こうか、これからの研究構想に胸を膨らませながら家路についた。

(2024年4月4~6日取材)

109



これから研究していくにあたって先生のルーツの川を知りながら自分なりの研究計画を考えていきたいです。あと、庄川育ちの僕からすると、南に向かって川が流れているのがやっぱり変な感覚になります…。(岡田優作さん)



犬山城から見た木曽川。時には牙をむく大河川と生きるために、人びとはさまざまな堤を編み出した



p6-9
高木英樹さん

提供: 高木英樹さん

——あらためて考える水泳文化の未来



水を見ると今もわくわくする。

岐阜県

の垂井町という水の豊かな地で生まれました。小さい頃から谷川で泳いだり、サワガニを捕まえてりして遊んでいました。

泳ぐのが大好きで、小学校の夏休みのプール開放は1年生から6年生まで休まずに参加しました。中学校では夏は水泳部、それ以外の季節はバスケットボール部に所属していたくらいです。

ご存じのように岐阜は海なし県ですから、初めて海を見たのは小学校中学年。「こんなにたくさん水があるんだ！」と驚いたことを覚えています。
大学の授業では海へ潜ったり2時間泳ぎつづける遠泳なども担当しましたが、海や水を見ると今でもわくわくするのです。

水を想う

みずぶん 水文ショートインタビュー

今号から新たに掲載する「水を想う」。これは機関誌『水の文化』の特集取材でお会いした方々に「水への想い」や「水にまつわる想い出」をお聞きするものです。記事では語りつくせなかったお話をどうぞご覧ください。



水泳

を始めたのは、5歳のときに父親と釣りに行って瀬沼川に落っこちて溺れたことがきっかけです。父親は那珂湊の出身で水に親しんでいたもので「待っていたら1回浮

p24-27
榎村幸治さん



p14-15
畔柳昭雄さん



記事

泳ぐだけじゃない?! 海水浴の価値——「海離れ」の今こそ海辺を考える

心落ち着く車窓からの水景

初めて 海水浴に行ったときに見た海がとても美しかったのです。朝起きると潮が満ちていて前日に泳いだときよりも水が多く、水底まで透き通っていて、魚が泳いでいる姿もはっきり見えました。
それからずっと海が好きです。最初から水面に浮かぶことができたので、泳ぐのを怖いと思ったことはありません。中学校では水泳部、高校では水上スキー部に所属していました。
都内で好きな場所は、都電荒川線と並行して流れている神田川です。川底に切り込みを入れているのか、水面が波打っているんですね。車窓から眺めていると、なぜか心がスッと落ち着きます。



水府流水術「浮身36体」の一つ「うたた寝」

——日本泳法一流派「水府流水術」を訪ねて

p30
矢野健一さん



p29
林 大介さん



記事

「泳ぐ」にまつわる水とヒト



記事

「日本最後の清流」で育った川ガキたち——川で安全に泳いで遊ぶ知恵の伝承

フナ釣りから始まった川の漁

最初の釣りは野池のフナでした。竹を切って竿をつかって池で釣りをし、次に四万十川の支流でハヤンボ（カワムツ）釣りを。そうして釣りを覚えていきました。季節によって釣る魚、獲る魚も変わります。春はフナ、夏は川でアユやウナギやナマズ、秋はウグイとコイ、冬はドンコです。冬は寒さに震えながら川に入って、石を起こして動きの鈍いドンコを「エビ玉」で捕まえます。エビ玉とはテナガエビを捕まえる網で、糸で編んだ直径15cmくらいの玉網です。ドンコは遠火でじっくり焼いて乾燥させて保存できるようにし、煮つけなどで食べました。白身でおいしいんですよ。

ウナギを捕まえてお小遣いに

夏

は暑いので、涼しさを求めてずっと川に浸かっていました。釣りをしたりエビを獲ったりしてね。四万十川では一年中遊んでいましたが、夏休みになる前、川は漁の場所でした。「コロバシ」というウナギ漁では竹の筒を使うんですが、ミズを掘りに行って竹の筒に入れて、夕方になると先輩に聞いたウナギの通り道に仕掛けに行き、翌朝の5時半とか6時にそれを引き上げに行きました。獲れたウナギを買い取りのお兄さんに渡すとお金がもらえたのです。お正月以外に現金をもらうことはなかったで、いい小遣い稼ぎでした。それでお菓子やBB弾を買ったりしました。

いてくるだろう」と様子を見て、私が浮いたときにすかさず引っ張り上げてくれました。父親に「また釣りに行きたいか」と聞かれ、行きたいと言うと「じゃあスイミングスクールに行きなさい」と。シャンプルーハットを使うくらい水は苦手でしたが、釣りに行きたい気持ちで勝ったんですね。今は人よりも多少は泳げるようになりました。「何かを続けるのは大事なことです」と子どもたちによく話しています。

一人では潜りに行かなかった

生まれ

育った白浜町（現・南房総市）でサザエやトコブシが獲れるのは5月から。今と違って深い場所じゃなくてもサザエはたくさんいたんですよ。潜るときは命綱と貝を入れる網を結びつけた樽を持って行きました。命綱は自分の腰にちよっと挟んでおいて、すぐに外れるようにして泳ぎます。命綱を体にしっかり結びつけないのは、もしも綱が岩に絡みついたら自由に泳げなくて溺れてしまうから。本職（プロ）の海女（あま）でも亡くなる人は時々いるのです。海は楽しいけれど危険もありますので、絶対に一人では潜りに行きませんでした。



p16
野口博子さん



記事

漁師さんはみんな泳げるの？——南房総の人びとに聞いた、海辺の暮らし

川で溺れかけて水泳の道へ

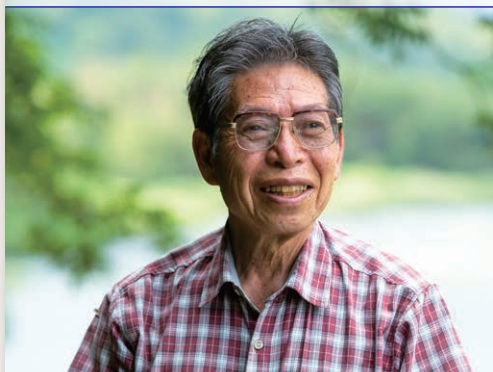


記事

なぜ180種もの泳ぎ方が？

訃報

古賀邦雄さん逝去——本誌連載「水の文化書誌」擱筆の半年後に



山口県の佐波川にて（2021年撮影）



長い間、本誌で「水の文化書誌」を連載してくださった古賀邦雄さんが2024年（令和6）3月27日に亡くなりました。享年80。古賀さんには連載のご協力のみならず、当センターのアドバイザーとしても数えきれないほどのご助言をいただきました。古賀さんのご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

古賀さんが水や河川、湖沼にまつわるさまざまな書籍や資料を集めることになったのは、水資源開発公団（現・独立行政法人 水資源機構）に勤めていたときに上司が発した「水にまつわる本を集めて整理してはどうか」という一言がきっかけだったそうです。

そして2008年（平成20）5月に私設の図書館「古賀河川図書館」を開きます。古賀さんが集めた書籍・資料は希少なものが多く、全国からさまざまな人たちが古賀さんのもとを訪ねました。編集部が初めて訪問したとき、足の踏み場もないほどの本の数

に圧倒されたことを思い出します。

2020年（令和2）3月、古賀さんは所蔵していた約1万2000冊を久留米大学御井図書館に寄贈されます。古賀さんは「立派な図書館がきちんと管理してくれるのでありがたいことです」と目を細めていました。古賀さんの蔵書は「古賀邦雄河川文庫」として公開されています。

坂本貴啓さんの連載「Go! Go! 109水系」の取材にもご同行いただくことが多く、お二人の会話から、そして古賀さんの川にまつわる史跡を見つける目の鋭さなどたくさんのお話を学ばせていただきました。

連載「水の文化書誌」を終える際に古賀さんにお話をお聞きしましたが、そのときに「ミツカン水の文化センターがすごいのは継続していることです。ずっと続けていただきたい」とおっしゃいました。その言葉を胸に、当センターはこれからも情報発信に努めてまいります。



（上）久留米大学御井図書館内に設置された「古賀邦雄河川文庫」。古賀さんが収集したさまざまな書籍・資料は後世に引き継がれる（下）古賀さんが愛してやまなかった筑後川
提供：坂本貴啓さん



連載の最終回となった「水の文化書誌」の誌面（『水の文化』75号）。この号には「擱筆にあたって」という古賀さんからのメッセージも掲載

快報

沖 大幹さんが「ストックホルム水大賞」を受賞



「ストックホルム水大賞」を受賞した沖 大幹さん

当センターのアドバイザーを務める東京大学大学院工学系研究科 社会基盤専攻 教授の沖 大幹さんが2024年の「ストックホルム水大賞（Stockholm Water Prize）」を受賞したことが2024年3月22日に発表されました。

同賞は「水のノーベル賞」とも称される、世界でもっとも権威のある水関連の賞です。ノーベル賞の選考を行なっているスウェーデン王立科学アカデミーの協力によってストックホルム国際水研究所が決定したものです。ちなみに3月22日は国連が定め

た世界水の日にあたります。

沖さんはグローバルな視野から取り組む水文学の先駆者として知られています。世界的な水収支や仮想水の流れ、再生可能な水資源量の時空間変動に関する研究への卓越した貢献が評価され、今回の受賞となりました。日本人の受賞は23年ぶり3人となります。

2024年8月の「ストックホルム世界水週間」の一環として王室による授賞式が行なわれ、記念講演も予定されています。沖さん、おめでとうございます。



一度は訪れたい「佐渡」

機関誌『水の文化』61号「水が語る佐渡」

いよいよ夏本番。夏休みに旅に出る方も多いと思いますが、まだ計画が固まっていない方にお勧めしたいのが、「佐渡」です。世界遺産への登録なるか、と注目の島ですが、水の観点で金銀山の採掘技術、農業技術、建築などを見ていくと、その優れた知恵や技術に圧倒されます。機関誌61号「水が語る佐渡」は旅のお供にぴったりですよ！冊子をご希望の方はHPからご連絡をお待ちしています。



2019年2月発行

皆さまからの感想、情報をお待ちしています！

『水の文化』77号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://forms.office.com/r/ZUZKT2xKG3>

送付先の変更やお問い合わせはHPの「その他のお問い合わせ」もしくは下記へご連絡ください。

FAX: 03 (6784) 3056

編集後記

今回の取材では、島原と水戸に同行させていただきましたが、そのどちらにも水と共に生きよう、水と共に楽しもうとする人の工夫や努力があり、その人の営みが歴史と合わさっていくことで「水の文化」が生まれるのだらうと大変感慨深い想いでした。これからもセクターの名に恥じないよう、様々な人の営み、「水の文化」を読者の皆様にお届けしていきたいと思っています。(森)

泳ぎの歴史をたどる中で、水中で安全を確保しつつ、目的を達するための術であれば「泳ぎ」なんだと、視野が広がったと思います。速さを目的としない日本泳法には、様々な目的を達するための技術が満載で、実際に拝見できて幸せでした。水中で自分も「うたた寝」(p.48)ができたなら、もっと「泳ぐ」が楽しくなりそうです。(松)

子どもの頃からスイミングスクールに通い、泳ぐことが大好きです。もうスピード重視で泳ぐことはありませんが、それでもたまに海水浴などの機会があると心躍るのです。大人になるにつれ、日焼けしたくない、薄着になりたくない、泳ぎから遠ざかっていましたが、久しぶりに思い切り水の中で体を伸ばしたいと思いました。(飯)

最後に泳いだのはいつだったか。記憶をたどると、どうやら20年前、スキューバダイビングで水中撮影するカメラマンのお供で、海に潜ったのが最後のようだ。人生の半分近く泳いでいなかったとは恐ろしい。パソコンの奥から出てきた、フィンをつけ海を漂う自分の写真を見ていたら、久しぶりに自然の中で泳ぎたくなった。(秋)

泳げないし濡れるのが嫌。砂浜でただただ暑い思いをする。そんな印象の海に数年前、子ども連れの友人と行くことがあった。でもその日はなぜか、子ども用の小さな浮輪を無理やり装着して果敢に海へと向かう。身体の一部となった浮輪のおかげか、行ったことがない場所まで泳ぐのがとても気持ち良く、海への印象が変わる思い出になった。(力)

子どもの頃、泳ぐことが大好きだった。スクールには通えなかったので、市民プールに行っては平泳ぎっぱくもがいていた。中学校の水泳授業で25mプールを20往復したが腕と脚のタイミングがどうもおかしい。だから胸を張って泳げると言えないままだったが、取材中に「自己流でいいのか」と気づいた。水泳パンツを買いに行こう。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第77号

ホームページアドレス

<https://www.mizun.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル
株式会社 Mizkan

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2024年(令和6年)7月 初版1刷

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授

陣内秀信 法政大学名誉教授

鳥越昭之 早稲田大学名誉教授

制作

森田浩正

松本裕佳

久保悦史

飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集

秋山健一郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.10-13)

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.24-27)

手塚ひとみ (pp.20-23)

開 洋美 (pp.28-31)

前川太一郎 (pp.14-19, pp.34-35, pp.48-49)

撮影

大平正美 (p.8, p.15, pp.34-35)

川本聖哉 (pp.24-27)

中野公力 (pp.42-47)

藤牧徹也 (pp.16-20, pp.36-41)

渡邉まり子 (p.10, pp.28-31)

描画

わたなべじゅんじ (pp.8-9, p.33)

印刷

中埜総合印刷株式会社



ミツカン 水の文化センター



表紙：茨城県水戸市に古くから伝わる「水府流（すいふりゅう）水術」の泳法「筏流（いかだながし）」。
先頭の泳者があおむけになって手のかきだけで前進し、その足に次々とつかまって流れていく浮身（うきみ）の組泳ぎ。水府流水術協会の皆さんが披露してくれた
撮影：川本聖哉

（上）取材中に偶然会えた、四万十川で岩から飛び降りる女の子。この流域にはまだ「川ガキ」が存在している
撮影：渡邊まり子

（下）昭和20年代後半、大阪府堺市で夏期に開かれる「浜寺水練学校」で泳ぎを教わる子どもたち。この頃はまだふんどし姿で泳いでいた
出典：『毎日新聞社 浜寺水練学校100年史』（毎日新聞大阪本社 2006）